

魔法少女まどか☆マギ
カ 別編～再臨の物語～
(第2部)

マンボウ次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生きることを望む生命はやがて死へと向かう。

その理もまた生きるものの運命。

人も魔女も、そして魔法少女も……。

第1部で見つけることができなかつた、もうひとつのグリーンフィードを巡って新たな展開を迎えます。グリーンフィードの転生から一夜明け、暁美ほむらが語る円環の理の秘密。

世界観・キャラクター・設定などは原作を踏襲し、若干のオリジナル要素を含みながら物語は展開していきます。

キャラ崩壊、エロ、百合はありません。

あくまで原作準拠で、できる限り世界観を崩さないよう、円環の理以降の平行世界を
ダークファンタジーとして描いています。

(毎週火曜日 AM10:00更新)

第1部はオリジナルサイト【アニメに！】でご覧いただけます。

animoni.mnpow.com/

目次

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部1話） 1

魔法少女まどか☆マギカ 別編 再臨の

物語（登場人物紹介） 9

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部2話） 13

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部3話） 19

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部4話） 24

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部5話） 29

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部6話） 35

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部7話） 40

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部8話） 48

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部9話） 54

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部10話） 60

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第2部11話） 69

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語く (第2部12話)	—	75	魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の	魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の
魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の		物語く (第2部19話)	—
物語く (第2部13話)	—	80	魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の
魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の		物語く (第2部20話)	—
物語く (第2部14話)	—	86	魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の
魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の		物語く (第2部21話)	—
物語く (第2部15話)	—	91	魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の
魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の		物語く (第2部22話)	—
物語く (第2部16話)	—	96	魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の
魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の		物語く (第2部23話)	—
物語く (第2部17話)	—	102	魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の
魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の		物語く (第2部24話)	—
物語く (第2部18話)	—	110	魔法少女まどか☆マギカ	別編く再臨の

物語く (第2部 最終話) | 157

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の

物語く (第2部 あとがき) | 164

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

1話）

すべての生き物は、生き延びるために、種の存続のために進化を繰り返してきた。強きも弱きも、正義も悪も、人も魔女も、生きる事への固執は変わるものではない。自らを存在させようとする意思は何よりも強く、時にはこの世の理に逆らい、どんな犠牲を払ってでも生きることを選ぶ。

そうして魔女は、生きるために自我と魔力を捨て魔獣になった。

これは進化でも退化でもなく、ただただ生きるための変化でしかない。もし魔獣に生きる目的があるとしたら、それはすべてを滅ぼし、自らも破滅を迎えるためだけに生きようとしているのかもしれない。

— 生きることを望む生命はやがて死へと向かう。その理もまた生きるものの運命。人も魔女も、そして魔法少女も。

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部）

放課後、淡く橙色に光るソウルジェムを手に持ち、バママはひとりで見滝原市の郊外を歩いていった。もちろんそれは、まだ見つかっていないもうひとつのグリーンシードを探すためだった。

昨夜の六千石町で起こったグリーンシードの転生と魔獣の出現から一夜明けて、ママはすぐに行動を開始していた。ママの考える魔法少女としての存在意義は、その使命を全うすること。自らの意思で魔法少女へと転身してから今まで、常に先頭に立ってこの見滝原を魔女から守ってきた。円環の理以降は魔女が現れなくなっていたが、今度は魔獣と呼ばれる新たな敵との戦いが始まってしまった。

ママは見滝原市のはずれにある風力発電所のそばを通り、ゆっくりと回る風車の動きを見ながら歩く。

それにしても昨日の一件、なぜ暁美ほむらは『グリーンシードの転生』を図ったのか。ママたちも六千石町の人たちも無事に済んだから良かったものの、天生目ゆう子の身を危険にさらし、魔獣を生み出してまで何をしようとしていたのか。そもそもどうしてグリーンシードを持っていたのかが謎だった。ほむらは多くを語らないし、世界の破滅を望んでいるわけではないはずだ。前日の戦いにしても、最後に魔獣を仕留めたのはほむらの光矢だったし、何か意図があるのは明らかなのだが。

ほむらは常に冷静で無駄な争いをしないから、皆が理解できない行動も何か目的があ

るのに違いないとママは考えていた。ただそれを話してもらえないのを少し残念に思いつながらも、ほむらの性格を考慮してあまり深く問いたださないようにしていた。

ママの手にあるソウルジェムは相変わらず淡い発光を続けるだけで、グリーンフィードの在処を掴めずにいた。魔力の波動も感じないし、魔女の結界も使い魔も現れない。ただソウルジェムの微かな反応は、この見滝原にあるグリーンフィードの存在を告げていた。

「これじゃ埒があかないわね」

徒歩での地道な探索は魔女探しの常だが、ソウルジェムの反応が鈍すぎて方角すら把握できない状況なので、こうして市内の隅々まで探し歩くしか方法がなかった。日も暮れてきたところでママは携帯電話を取り出し、着信履歴から電話をかけた。

「そっちの様子はどうかしら？」

『全然。使い魔の1匹も現れやしないよ』

電話の相手は佐倉杏子だった。杏子は市内の緑地周辺を探索していた。

「そろそろ時間も遅くなっちゃったし、一度戻りましょうか」

『わかった。じゃあほむらの家に向かうよ』

と言って通話を終える。ふたりは手分けして広い市内を探索していた。魔法少女同士のテレパシーはせいぜい100メートル圏内くらいしか届かないので、今回も携帯電話

話を持ち歩いていたので。ただし、ほむらは携帯電話を「必要ない」と言つて持とうとしなかったが。

ママがほむらの家に着く頃には、あたりはすっかり暗くなっていた。

暁美ほむらの家は真つ白な円形の部屋になっていて、天井からは大きな時計の機械部分吊るされており、壁にはたくさんのデイスプレイモニタが掛けられていた。モニタには、絵画のような壁紙のような不思議な模様をした映像がいくつも映し出されている。部屋の中央には丸いテーブルがあり、その周りを囲むように半円形のソファが置かれていた。

先に到着していた杏子はそのソファに座り、即席のカップ麺を食べていた。

「よお、遅かったじゃないか」

と言つて、うつすらと湯気の立つ麺をズルズルと勢いよくすすむ。ほむらは静かに向かいのソファに腰掛けて

「その様子じゃ、何も見つからなかったようね」

いつものように淡々と、他人事のように言葉を発した。携帯電話を持たないほむらには今日の搜索状況は何も話していなかったが、顔を合わせて察したようだった。

「ソウルジェムの反応がこれじゃね」

ママが持つソウルジェムはやはり薄いオレンジ光を放っているだけで、さつきと光の

強さが変わっていない。六千石町のとくと同じでグリーンシードが近くにあるのか離れているのか、方向も距離感もまったくわからないので、今日一日では何も掴めなかった。

「それで暁美さん、もう一度確認しておきたいんだけど……グリーンシードの在処、暁美さんは知らないのよね？」

「同じ質問は時間の無駄よ。そんな詮索をするくらいなら、どうやって見つけるかを考えるべきね」

マミの質問を、ほむらはどちらとも取れない答えではぐらかした。疑うわけではないが、「もうひとつも私が仕組んだと思っっているのかしら？」と言っていた昨日の答え同様に、はつきりしない返事が気になった。が、杏子は別のことを考えたらしく

「それよりさ、ほむらは何でグリーンシードを持ってたんだ？ 魔女もいないのにどうやって手に入れたんだよ」

カップ麺の汁を飲み干してからほむらに問いかけた。確かにグリーンシードは魔女を退治したときに得られる魔法少女としての報酬だが、円環の理以降は魔女が存在していないので手に入れることはできないはずだった。マミもそのことは気になっていたので、ソファに座ってほむらの言葉を待った。

「グリーンシードは、魔女が落とすだけではないでしょ」

ほむらの答えは相変わらず言葉が少ない。杏子はため息をつきながら「またそうやって、わかりくい言い方するなよなあ」

理解できないと言いたげに不満な顔をするが、マミはすぐに気付いた。

「魔法少女の……ソウルジェムね」

「ええ、そうよ」

マミの洞察力はさすがで、ほむらの簡単なひと言だけでグリーンフィード入手方法を言い当てた。

「魔法少女は私たち以外にも、どこかにいる。ほとんど残っていないかもしれないけど、この世界にはまだ何人が存在しているはずよね」

マミも杏子も忘れていたが、キュウベえによって生み出された魔法少女は世界中にいる。魔女が存在しない世の中になってからはグリーンフィードが手に入らないので、ほとんどの魔法少女がソウルジェムの穢れを浄化できずに円環の理によって消滅しているかもしれないが、中にはまだ生き延びている者もいるはずだった。

「でも穢れが溢れればソウルジェムはグリーンフィードに変わるけど、円環の理によって魔法少女も、グリーンフィードも一緒に消滅してしまうわよね」

それが円環の理による消滅だとマミは認識していたが

「円環の理は、魔法少女の救済とでも呼ぶべき存在よ。この世のすべての魔女を産まれ

る前に消し去るというのは、穢れに満ちた魔法少女を殺してしまうような意味ではなくて、穢れを浄化し、悲しみや憎しみのない世界へ導くことを意味しているわ」

ほむらがめずらしく多弁だった。

「つまり、穢れが溢れてグリーンフシードへと変わってしまったソウルジェムを、清浄な魂の宝珠へと相転移させる。その作用の一環として、魔法少女とソウルジェムは救済されてこの世から消滅するのが円環の理」

これまであまり理解されていなかった円環の理を、こうも朗々と説明するほむらにふたりは聞き入った。

「グリーンフシードの浄化が行われた時点で魔法少女は救済され、身体と共に安息の眠りにつくのよ。ただし、グリーンフシードだけは元の魔法少女と完全に別個の存在になってしまうから、それを回収するのは不可能ではないわ」

マミも杏子も言葉が出なかった。ふたりはもちろん、過去に誰も魔法少女の穢れたソウルジェムを手に入れようなどとは考えもしなかっただろう。この発想が浮かんだのは暁美ほむらの、時間遡行者という能力があったからこそだった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mangobou.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編 再臨の物語（登場人物紹介）

★佐倉杏子

見滝原中学2年生。

男勝りな口調や好戦的な態度から、粗暴で利己的なだけの性格のように見えるが、実は他人を気にかけて助けようとしたりと不器用ながらも純粋で優しい性格も持っている。八重歯が特徴で、長い赤髪を黒いリボンでポニーテールにまとめている。

ソウルジエムの色は赤、シンボルマークは楕円、変身後の位置は襟元。大きな穂が特徴的な槍を武器に使う。

★巴マミ

見滝原中学3年生。

面倒見の良い、おしとやかなお姉さんの存在。学年はもちろん魔法少女としても先輩である彼女は、後輩の杏子に優しくも大人っぽく接している。

ソウルジエムの色はオレンジ、シンボルマークは花、変身後の位置は頭部右側の髪飾

り。16～19世紀頃の西欧で使われていた古風なマスクット銃を武器に使う。

★キユウベえ

少女の願い事をひとつだけ叶えてくれる魔法の使者だが、願いと引き換えに魔法少女となる運命を課す。魔法少女の『希望』から『絶望』への転移（魔女化）によって生じる莫大なエネルギーを回収することが目的でこの星にやってきたエイリアン。円環の理によつて魔女への転移が発生しない世界になつてからは、魔法少女たちと対立するこゝとがなくなつたので杏子やマミと協力的関係を築いている。

★鹿目まどか

過去の全ての魔法少女を、諦めかけた暁美ほむらを、絶望の淵から救うためにキユウベえと契約を交わす。まどかの願いは因果律に逆らい、宇宙を再編するほどのものだった。それからは絶望によつて魔女になる寸前の魔法少女の前に現れ、呪いを受け止めるだけの概念とも呼べる存在、円環の理となる。まどかの存在を覚えているのは暁美ほむらと、その名前に懐かしい響きを感じている肉親だけになる。

★暁美ほむら

学業・運動・容姿に優れた才色兼備だが、人を寄せ付けない雰囲気を纏っている。鹿目まどかの願いとその存在の終焉を見守り、魔法少女たちの中で唯一すべての記憶を背負って生きている。円環の理以降しばらくして姿を消し、今はどこにいいのか、杏子やマミも知らない。いつからか時間操作の魔法は失われてしまったらしい。

ソウルジェムの色は紫、シンボルマークはダイヤ、変身後の位置は左手の甲。

★美樹さやか

恋心を抱いていた相手（上条恭介）の怪我を治すため、自らの意思でキュウベえと契約して魔法少女になるが、のちに円環の理によつて再編された世界で魔法少女としての力を失い、魔女化せずに消滅した。

ソウルジェムの色は青、シンボルマークはC（楽譜において4分の4を表す拍子記号が由来という説がある）変身後の位置はお腹（おへその辺り）。

★天生目（あまのめ）ゆう子

本作品のオリジナルキャラクター、六千石町に在住、尾島中学2年生。明るく活発で、学校では陸上部に所属している。髪はショート、身長147cm、勉強は苦手。部活に入れ込みすぎて勉強が疎かになり、両親から責められる。杏子とはバス停でたまたま知り

合い、杏子の強引だが人懐こい性格に惹かれて友人になる。

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

2話）

—— かつて

ほむらが歩んだ時間軸のひとつ。円環の理がまだ存在しない世界で、ある魔法少女が絶望によりソウルジェムを限界まで濁し、魔女になってしまったことがあった。魔女は倒され、ほむらはそのグリーンフィードを手に入れていた。グリーンフィードを落としたのは魔女だが、それはもともと魔法少女のソウルジェムが姿を変えたもの。魔女になる前でもなった後でも、どちらも同じ物なのだ気づいたのだった。

この記憶を持つほむらは、自分たち以外にもどこかにいるかもしれない魔法少女を探すため、しばらく見滝原を離れていた。魔女が産まれなくなつた世の中で他の魔法少女を探すのは容易ではなかったが、とある海沿いの街に訪れた時、偶然にもソウルジェムを限界まで濁している魔法少女に出会った。

少女が夜の浜辺でひとり、真っ黒に濁ってしまったソウルジェムを握りしめているところにほむらは通りかかった。夜の月に照らされながら波打ち際に座る少女のソウルジェムは、ひと目で限界に達しているとわかるほどに黒く穢れを放っていた。

「あなた、魔法少女ね」

「え？」

と振り返った少女は目の周りが薄黒く窪み、とても悲しげで、しかし自分の最期を悟っているかのように穏やかだった。

「そのソウルジエムはもう限界ね。あなた、ずっと魔力を使い続けてきたでしょう」

「よくわかるね。もしかして、君も魔法少女？」

ほむらよりも2つ3つは年上に見えるその少女は、取り乱すこともなく静かに答えた。

「ええ、そうよ。たまたま通りかかったのだけれど、残念ながら私にはあなたを助けることはできない。間もなくあなたは円環の理に導かれて消滅するわ」

「わかっているよ。グリーンフシードが手に入らなくなったからね。友人の優里夏（ゆりか）も昨夜、逝ってしまったよ」

「友人の……魔法少女？」

「ああ、一緒にこの街を守ってきた仲間だった。昨日の夜、同じようにソウルジエムの穢れが溢れて、黒いドレスを着た魔法女のようなものに消されてしまったよ。あれが円環の理なんだろう？」

この少女は、円環の理を目撃していた。しかもこの海辺の街には魔法少女がふたりも

いたことにほむらは驚いた。そして今まさにこの魔法少女も円環の理によって消滅しようとしている。それはとても憐れで救いようもないことだが、他人事ではなかった。ほむらも、マミや杏子も、グリーンシードが手に入らない世界ではいつ同じ運命となるかもわからない。

「わたしと優里夏は癒しの魔法が使えたからね、戦いのない世の中になってからは傷ついた人や動物たちを魔法で助けていたんだ。でも、どんなに癒しの魔法に長けていてもソウルジェムの穢れを浄化することはできなかった」

この少女は、魔法の力を人助けに使っていた。本来、魔法少女は魔女と戦いグリーンシードを得ることでソウルジェムを浄化する。だから普通はグリーンシードを手に入れるため以外に魔力を使うべきではないのだ。

「当たり前でしょう。あなた達はそんなことも知らずに魔法を使っていたの？」

「もちろん知っていたさ。でも、魔法はさ……戦うためだけに使うものじゃないと思うんだ」

ほむらは言葉がなかった。なんて馬鹿なと思いつながらも、自己の犠牲を顧みずに魔法の力を行使した結果、自らの滅びに直面してもそんなことを言えるこの少女にそれ以上の言葉が出てこなかった。

やがて少女は「うぐつ」と苦しそうに胸を押さえてその場に倒れ込み、星空を見上げ

た。

「もう……ずいぶん長いこと魔法少女をやってきたけど、わたしは間違っていないかと思う。ここで終わってしまったも、自分のしてきたことに後悔はないよ」

自分に言い聞かせるように苦し気な声を振り絞ると、ソウルジェムは少女の手から離れ、ほむらの目の前で真っ黒な光を放射状に放った。魔法少女の魔力の源であるソウルジェムがグリーンフシードへと姿を変え、魔女化が始まる。

「ゆう子、ごめんな。お姉ちゃんはもうだめだ」

少女は細い声で呟いた。

やがて明るい星空から月明りよりもまばゆい光明が差し、暗黒の魔女を救済すべく、天高くに黒いドレスの円環の理が訪れた。少女は光の粒に包まれ、ゆつくりと身体が透き通っていく。膨大な穢れにむしばまれた魔法少女は、その苦しみから解放され安息の世界へと導かれていくのだ。黒く濁ったグリーンフシードからは今までに溜め込んだ穢れがモヤのように吸い出されていった。

ほむらは目の前にある真っ黒なグリーンフシードを見つめた。これだけの穢れを溜めてしまうのに一体どれだけ癒しの魔法を使い続けてきたのか。この穢れの量には、少女が言っていた「魔法は戦うためだけに使うものじゃない」という意味がありありと込められていた。

「こうして最期を看取るのも何かの縁かもしれないわね。あなたの名前を教えてもらえ
るかしら」

普段は他人に関心を持たないほむらが、今日まで見も知らない魔法少女に名前を尋ね
た。

「わたしは、誕生日……涼子（あまのめ りょうこ）」

最後に名前を告げた誕生日涼子が、少し笑ったように見えた。ほむらはそつと手を伸
ばし、まだ穢れの抜けきっていないグリーンフシードを掴み懐に引き寄せると

「あなたのような魔法少女を、私はもうひとり知っているわ」

と言って、消えゆく少女に目を向け

「あなたの意思は無駄にはしない。このソウルジェムは預かっておくわよ」

グリーンフシードではなく、ソウルジェムと呼んだ。魔女としてではなく、正しき魔法
少女として消滅していく誕生日涼子への敬意を込めて。

ほむらの頭の中に

（ありがとう）

という声が聞こえた気がした。

光の粒に包まれた少女の身体は、一瞬の眩しい閃光と共に姿を消した。魔法少女の救
済は成され、天高く見下ろす黒いドレスの円環の理も夜空へと消えていったが、ほむら

の手には黒く穢れを発するグリーンフシードが残っていた。

見上げた空には月が美しく輝き、柔らかな海風がほむらの髪を揺らした。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

3話）

ほむらの話は衝撃的だった。ママたちの他に生き残っている魔法少女がいて、ほむらの目の前で円環の理によって消滅し、グリーンシードまで手に入れることができた。さらに驚いたのは、その魔法少女の名前が天生目涼子……ゆう子……お姉ちゃん。

「ほむら、まさかその魔法少女って……」

「ええ、天生目ゆう子のお姉さんね」

杏子は「どうして」と言いたげに顔を強張らせる。天生目涼子の持つていたソウルジェムが妹のゆう子の手に渡るなんて、そんな運命があるのか。それにゆう子に姉がいたことも知らなかった。そんな杏子を見て、ママは言葉を付け足した。

「だからゆう子ちゃんにソウルジェムを託したのね。でも、よくゆう子ちゃんを見つめられたわね。円環の理によって消滅した者は、普通の人間の記憶には残らないんですよ？ 家族に聞いてもわからないはずなのに」

「そうか、だからゆう子はお姉さんがいたことを覚えてないのか」

魔法少女は命を落とすと、周囲の人間の記憶から消えてしまう。ただし、ほむらたち

魔法少女は人間としての記憶と魔法少女としての記憶の2つを合わせ持っているので、美樹さやかや天生目涼子が存在していたことを忘れることはない。もし天生目涼子が人間としてその生を全うしていたなら、妹であるゆう子の記憶にも残るが、魔法少女として消滅したことでこの世の存在から除外されてしまうのだった。

「天生目ゆう子を見つけるのは難しくはなかったわ。珍しい苗字だったし、ソウルジェムに残る記憶を少しだけ見させてもらったから」

ほむらは時間操作の魔法を使って、天生目涼子の記憶を辿っていた。彼女はずっと六千石町で家族と暮らしていたが、高校進学を機に県外で寮生活を送っていた。いつから魔法少女になったのかはわからないが、六千石町にいた頃にキュウベえと契約を交わして魔女との戦いに身を置いていた。もちろん魔法少女だったことは誰にも話していないのだろうが、その形見であるソウルジェムは妹であるゆう子に託された。

「ゆう子ちゃんにソウルジェムを託したのは偶然じゃなくて、お姉さんの意思を残してあげたのね」

マミが思ったとおり、ほむらは心の荒んだ魔法少女ではなかった。ゆう子の身体を媒体としグリーンフシードの転生などという危険なことをしてはいたが、それはほむらなりに考えた天生目涼子への敬意の表れだったのかと思うと、なんだかとても嬉しかった。

だがほむらは難しい顔をして

「私は良いことをしたとは思っていないわ。それよりも、これで在処のわかつているグリーンシードはあとひとつしか残っていないのよ。これがどういふことかわかる？」

「どういふことって、あとひとつグリーンシードを見つければいいだけだろ？」

杏子が即答する。

「相変わらず安直ね。あなたのソウルジエムを見せてみなさい」

言われて杏子が淡く発光するソウルジエムをひよいと投げ渡すと、ほむらはそれをふたりに見えるように掲げ

「見なさい、昨日の戦いで穢れが増しているわ。これをどうやって浄化するつもりなの？ グリーンシードが無ければ私たちはそのうち滅びゆく存在なのよ」

杏子のソウルジエムには黒い濁りがゆらゆらと混じっていた。それはマミやほむらのソウルジエムも同じで、まだ溢れるとまではいかないが蓄積されていく穢れは減らしようがない。そして昨日の魔獣との戦いでほむらが放ったあの光の矢を「一度だけなら」と言った理由もそれだった。これ以上 強い魔力を使えばほむらも危ない。

「そんなこと言ったって魔女は出てこないんだし、無いものは仕方ないだろ。あとひとつが見つかっても、穢れを吸えるかわからないんだから」

「楽観的ね」

ほむらは呆れたように杏子のソウルジエムを返す。マミもそれは承知だが、杏子と同

じく無いものは仕方ないと思つていた。

「暁美さんはその為にグリーンフシードを探していたの？」

「そうね。私はこのまま指を啜えて消滅を待つなんて御免だわ。こんな運命だからこそ抗つてみせる。私は魔女にもならず、消滅もせず、円環の理さえも覆してみせる。その為にはグリーンフシードが必要なのよ」

ずいぶんと強気な発言をするほむらだが、いつもの抽象的な言い方にマミと杏子はいまいちピンとこない。

「だから、グリーンフシードを手に入れて今度は何をしようつてんだよ」

杏子が少し苛立つが、マミがそれを制して

「まあまあ。とにかく、あとひとつのグリーンフシードを見つけましょう。話はそれからね。今日は手がかりゼロだったけど、どこかにあるはずだし。明日は週末だから、柚子ちゃんにも手伝ってもらえるか聞いてみましょう。私が連絡しておくから」

と言つてこの日は散会した。杏子も樂觀的なことを言っているが、危機感があった。ゆう子の姉が穢れの蓄積によつて消滅していたことは少なからずショックだったし、明日は我が身なのも頭ではわかっている。杏子がいつも強気な発言が多いのは、自分の弱さや脆さをわかっているからだつた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mangobow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部

4話）

翌朝、マミと杏子、そして天生目ゆう子は見滝原市内の水上公園で待ち合わせた。前夜にマミはゆう子に連絡し、グリーンフィールド探しを手伝ってもらえるよう約束をしていた。ただ、ほむらだけは今回も単独で行動するようで、皆とは会わず朝早くからどこかに出かけた様子だった。

「ゆう子ちゃんは、見滝原に来るのは初めて？」

「マミはバスで1時間以上かけて来てくれたゆう子に気を遣って尋ねた。」

「いいえ、何度か来たことはあります。シヨツピングなんかは六千石町よりも見滝原のほうが便利ですもんね」

「そうね。大きなシヨツピングモールもあるし、ゆう子ちゃんが着ているような可愛い服もたくさん売っているわよね」

ゆう子は濃いグレーのインナーシャツに薄いグレーのジャケット、深紫色のミニスカートの膝上まであるニーソックスとブーツを履いた可愛らしい恰好をしていた。先日の六千石町ではもつとラフな服装だったが、今日はその時とはイメージが変わってい

る。

「でも普段はもっと楽な格好をしているんですけどね。今日は気合入れて来ちゃいました」

にこやかに杏子の方を見るが、なぜか杏子は話しづらそうに目を合わさず黙っていた。マミは杏子のおかしな態度に気付いていたが、それを口にする事もなく

「それじゃ、佐倉さんとゆう子ちゃんふたりで街の中心部の歓楽地を回ってみてちょうだい。私は川沿いを南の方へ探索してみるから」

と言って杏子とゆう子を一緒に行動させるように促した。

「ゆう子ちゃんは初めてだから、佐倉さんと一緒に探してみて。佐倉さん、先輩として面倒を見てあげてちょうだいね」

「わかったよ」

杏子は不機嫌そうに頷く。マミはそんな杏子の素振りを気にせず

「夕方3時にここで待ち合わせしましょう。何かあったら携帯で連絡を取るようですね」

それじゃ、と言って川沿いの方へ向かっていった。杏子もすぐに街の中心部に足を向

け
「行こうぜ」

と素っ気なく歩き出す。

「あ、待って杏子ちゃん」

ゆう子はそんな杏子の態度をいぶかしく思いながらも、急いで後を追いかけて公園を後にした。

（佐倉さん、あなたの考えていることも分かるわよ）

マミは、どうして杏子が冷たい態度をとっているのかわかっていた。

（昨日の暁美さんの話で、ゆう子ちゃんがお姉さんを亡くしていることを気にしているのね）

冷たいというよりも、ゆう子にどう接していいのかわからなくなっているのだった。杏子も昔、家族3人を失っている。状況は違えど、それは魔法少女の因果によつて訪れた不幸であることには変わりはない。杏子は家族を失った原因が自分にあると思いつているので、魔法少女への契約がゆう子の姉・天生目涼子の消滅へと繋がってしまったことを他人事のように思えなくなっていた。しかもゆう子には姉に関する記憶がまったく無いので、何も力になれない自分とやり場のない悲しみが一層杏子を苛ませた。

（でも佐倉さん、誰でも少なからず悲しみを抱えて生きているものよ。そしてその悲し

みは、自分の力で乗り越えていかなきゃいけないわ）

悲しみは絶望を生み、絶望は魂を穢す。グリーンフシードが手に入らない今、魔法少女の最大の敵はソウルジェムの穢れだ。負の感情をコントロールできなくなれば、それだけ大きな穢れを生み出すことになる。天生目涼子の消滅を知ってしまった杏子は、自らの過去の贖罪と結び付けて自分を見失ってしまうかもしれない……そう思ったママは、敢えてふたりを一緒に行動させ、杏子はゆう子を助け、ゆう子は杏子の支えになるよう願っていた。

見滝原は市内を東西に分断するように大きな川が流れていて、川の東側に街の中心部があり、西側には発電施設や工場が広がっている。川沿いには整備された大きな歩道があつて、所々に設置された階段で川縁まで降りることができるようになっていた。

ママはその川沿いの歩道を南下して、反時計回りにぐるりと街の中心部へ戻るつもりだった。

見滝原市は近年、最先端技術を取り入れた都市開発が進められてきた近未来型都市だが、街の西側はまだ古い工業地が多い。昨日はその発電施設や工業地の周辺を探索してきたけれど、特に手がかりは掴めなかった。どちらかと言えば、未だに古い工業地が残る西側の方が魔女が隠れるのに都合が良さそうではあるが、まだ孵化していないグ

リーフシードが人の手にあつたとしたら、ひと気の多い場所を探した方が効率的かもしれない。そう考えて今日は、杏子たちには人がたくさん集まる歓楽地へ向かつてもらい、マミは川沿いの新興住宅地周辺を探索することにした。

週末の午前中ということもあつて、川沿いは散歩をする人たちや川辺の緑地で遊ぶ家族連れが多い。小さな子供が無邪気に遊ぶ姿や、年配の老夫婦が仲良く歩いている所を見る度に、今までこの街を魔女から守つてきた自分が誇らしく思えた。

マミはソウルジェムを抱え、川沿いの歩道を南に向かつて歩く。

良く晴れた日で、通りかかる人々の表情までもが明るく朗らかに見えた。とても魔法や使い魔が現れる雰囲気ではないが、そんな普通の日常を一変させてしまうグリーンフィードがあるかもしれないと思うと、マミは気を抜くことができなかつた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

5話）

【聖大橋】と書かれた大きな橋を通り過ぎ、川沿いの歩道から住宅地の方に分岐する道を下りていく。マミの手にあるソウルジェムは変わらず淡い発光を続けているだけで、今日も探知機としての機能を発揮できないでいた。

（やっぱり使い魔や魔法の境界がすぐそばに現れないと反応しないのかも）

それはつまり、まだ街の人々には影響が出ていないわけだが、この広い見滝原市内をソウルジェムの反応無しに探すのは骨が折れる。

住宅街を抜け、並木の連なる遊歩道を過ぎると、大きな高架道路に出た。高架下をくぐるとその先は高いビル群が立ち並ぶオフィス街になっている。オフィス街といっても所々に人工の緑地が敷いてあり、中には公園のようにひと休みできる場所もあるのだ、2時間以上も歩き続けてきたマミはここで少し休んでいくことにした。

人工の水場とベンチがいくつもあるだけの簡素な公園で、ちょうど昼時で天気も良いから、昼食を摂る人たちが利用している。公園の中央にある水場を囲むように6つのベンチがぐるりと置かれていて、そこにはサラリーマン風の男性、作業着を着た2人組、

スーツ姿の女性、そして小さな少女がそれぞれ座っていた。

ママは空いているベンチに腰掛け、ふうつとため息を吐いた。ひと休みした後は街の中心部へ向かい、そのまま水上公園に戻るつもりだった。

(佐倉さんは上手くやっているかしら)

雲ひとつない青空を眺めながら杏子たちのことを気にかけていると、ママの横に少女がちよこんと座ってきた。さつきまで隣のベンチにひとりで座っていた、5歳か6歳くらいのが可愛らしい少女だった。もしかして他の利用者が子供を連れてきているのかと思いい周囲を見回すが、誰もその少女がママの隣に座ってきたことを気にしている様子はない。休日の昼にこんなオフィス街の公園に小さな子供がひとりでいるので、もしかしたら家族とはぐれて困っているのかと思いい

「こんにちは。何かご用かしら?」

と優しく話しかけた。

「誰かと一緒に来ているの? はぐれちゃったのかな?」

今度は首をかしげて、少女の顔を覗きこみながら尋ねた。少女はママの手をじつと見つめて

「それキレイだね」

と指を差した。その少女が指差すのは、ママが両手で抱えているソウルジエムだつ

た。

「え？　これが、見えるの？」

一瞬この子も魔法少女なのかと考えたが、こんなに幼い魔法少女がいるはずがない。それに今は、天生目ゆう子のようなイレギュラーがない限りキュウベえも新しく契約をするはずがないし、何よりも普通の人間にはソウルジェムは見えないはずなのだが……。

「うん、見えるよ。前にも見たことあるもん」

違う魔法少女の物が、他にも見たことがあるという。

「前にもって、いつかな？　どこで見たことあるの？」

「え〜つとね、もう忘れちゃった」

まだ地に付かない足をブラブラ揺らしながら、幼い笑顔を浮かべる少女は不思議なことを言う。自分で持っているわけではなく「見たことがある」ということは、やはりこの子自身は魔法少女ではないのだろう。

（もしかして、魔法少女の素質がある子なのかしら）

だとしたらソウルジェムを見ることができるのかもしれないが、こんな小さな少女がすでに魔法少女の素質を備えているのは変だな、とも思った。もともと魔法少女は「第二次性徴期」と呼ばれる、10歳から15歳くらいまでのいわゆる思春期の少女のごく

一部に現れる素質で、まだ5・6歳ほどにしか見えないこの少女に備わるものではないはずだった。ただ、そんな話をこの少女にしても無駄だとわかっているの、ママはそつとソウルジエムをしまい

「ところであなた、ひとりなの？　もしかして迷子かな？」

と、少女がひとりであることを心配して訊いてみた。ここは小さな子供が遊ぶような公園ではないし、周りに保護者らしき人も見当たらない。

「わたし迷子じゃないよ。くるみだよ」

「くるみ？」

「うん、くるみ。つぶら　くるみっていうんだよ」

幼い少女は自分の名前を名乗ったようだ。

「そっか、くるみちゃんっていうのね。くるみちゃん歳はいくつ？」

「6歳だよ」

このくらいの子供はまだ会話運びが上手くないだろうから、そこはママも考慮して話のペースを合わせる。

「あら、きちんと言えて偉いわね。じゃあ　くるみちゃん、お父さんとお母さんは？」

「お父さんとお母さんはいないよ」

「いない？」

「マミは言葉を詰まらせた。もしかして両親を亡くしているのだろうか。」

「でも、お姉ちゃんはいるよ」

聞くと、両親はなく姉とふたりで暮らしていると言う。マミはそれ以上家族の話題は避け

「じゃあ、お姉ちゃんのとこに帰ろうか。ここは小さい子がひとりで遊ぶ場所じゃないのよ」

と言つて立ち上がった。小さな子をこんなオフィス街の真ん中で放っておくわけにもいかないし、ひとりで帰らせるのも不安なので、マミは手を差し出し少女を家まで送り届けようとした。少女も人懐こく

「うん、一緒に帰る」

とマミの手を握りベンチからピヨンと飛び降りた。

グリーンフィールドを探しているマミが会った、ソウルジェムが見える不思議な少女、つぶら くるみ。

マミは特に疑うこともなく、少女の手を引き公園を後にした。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mnbow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

6話）

杏子たちは住宅地の北側に位置する、街の中心部の探索を始めていた。大きなショッピングモールがある歓楽地は休日を通り過ぎておやすみの人で賑わっていて、とりわけ若者や子供連れなどが多く集まっている。行き交う人々はショッピングを楽しんだり、劇場やアミューズメント施設へ入っていったりと、思い思いの時間を過ごしていた。

杏子はその人々を横目に、ソウルジェムを握りしめたまま黙々と探索に集中して歩き続けた。週末を楽しむ人々の中で、鋭い視線を放つ杏子だけはまるで別世界の人間のように暗い雰囲気醸し出していた。ある時はすれ違う若者の手元を凝視し、ある時は遠く離れた少女たちの動きに注視し、グリーンシールドを持っている者はいないか、魔法の結界や使い魔の気配がないかを注意深く探し歩く。

怖いくらいに真剣な杏子の後ろを、歓楽地の賑やかさと華々しさをキョロキョロと眺めながらゆう子が続いた。左耳のイヤリングに収まる小さなソウルジェムを薄く光らせながら後を追っていくが、お互いに公園を出てからずっと黙ったままなので、何をどう探しているのかわからない。それでも杏子の進む方へと続きながら

「杏子ちゃん、あの服カワイイね」

とか

「杏子ちゃん、あそこのクレープ美味しそうだよ」

などと和ませるように話しかけてみるが、返ってくる返事は

「ああ」

とか

「後でな」

といった素っ気ない言葉ばかりが杏子の背中から発せられた。さすがに耐えかねたゆう子は

「ねえ杏子ちゃん、私も一緒に探すから、どうしたらいいか教えてくれないかな」

努めて明るい声で言うと、それまでひたすら歩き続けていた杏子は突然立ち止まり、思いもよらないことを訊いてきた。

「なあゆう子、どうしてグリーンフシード探しを手伝いになんか来たんだよ」

「え、どうしてって……」

杏子の質問の意味がよくわからないゆう子は答えに困っていると

「昨日の戦いで分かっただろうけど、あたし達は遊びでやってるんじゃないんだ。命を危険に晒して、死を覚悟してやってるんだ。お友達ごっこのおふざけじゃ務まらないん

だよ」

背を向けたまま、冷たく突き放すように言い放たれた。

「わかっているよ。私だって杏子ちゃんと同じ魔法少女なんでしょ？ グリーフシードを手に入れないと生きていけないって昨日の電話で巴さんに聞いたから、私も役に立たなきゃいけないって思ったから来たんだよ。危険なことは覚悟してるつもりだし、それに……」

ゆう子の言葉が終わらないうちに

「命を危険に晒すつてのはな、そうするしか他に仕方ない奴だけがやることなんだよ。そうじゃない奴が首を突っ込むのはただのお遊びだ。危険は覚悟してるつもりなんて、そんな生つちよろいおふざけは足手まといなんだよ！」

「杏子ちゃん、どうしたの……？」

「お前には家族がある。勉強や部活や、やらなきゃいけないことが他にたくさんある。大切なモンを失つちやいけない奴が命を懸けてやることじゃないんだ」

感情的な杏子に圧倒され、ゆう子はそれ以上喋れなかった。

「このまま帰りな。そしてもう二度と魔法の力を使おうなんて考えないことだ」

辛辣な言葉突き付け、杏子はひとりで歩き出した。ゆう子は立ち止まったまま動けず、杏子の後ろ姿を見つめることしかできなかった。人々で賑わう歓楽街の中に杏子の

姿が消えていつても、ただ茫然とその先を見つめていた。

「くそっ！」

杏子はしばらく歩いてから、苛立ちを抑えきれずにひとり喚いた。すれ違う人たちがチラつと視線を向けるが、何事もなかったかのように横を通り過ぎていく。

杏子は不器用すぎた。ゆう子の身を危険に晒したくない、魔法少女になつてしまった過去を変えることはできないが、せめて今の幸せな生活を壊したくない、そんな気持ちとうまく伝えられずにゆう子を突き放してしまった自分が許せなかった。もつと他に言い方はあつたらうに、あまりに感情的になつてしまったせいでもないことを言つてしまった自分に腹が立った。天生目涼子の死を知つてしまったが故に、同じ不幸を巡らせてはいけなないとばかり考え、冷静さと素直さを見失つてしまつていた。

(あたしは何をしてるんだ)

ゆう子が悪いわけではない。悪いのは感情をぶつけてしまった自分だ。すぐに引き返せばまだゆう子がいるかもしれない……今ならまだ間に合う……と思いつながらも足は勝手に前へ前へと進んでしまい、そのまま後ろを振り返ることもできずに杏子は歩き続けた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

h t t p s : / / a n i m o n i . m a n b o u . c o m /

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く (第2部

7話)

まだこの世界に魔女が存在していた頃、ほとんどの魔法少女は常に単独で行動していた。それぞれの魔法少女は自分のテリトリーを持ち、その中で産まれる魔女を退治することです。グリーフシードを得て、ソウルジェムの穢れを浄化する。同じテリトリーに複数の魔法少女が存在すると、どうしてもグリーフシードの奪い合いが起こってしまい、縄張り争いに敗れた者は新たな場所を求めて移動するか、やがて魔女と成り果てるしか道はなかった。

しかしこの見滝原では今、たったひとつのグリーフシードを探してマミ・杏子・ほむらの3人の魔法少女が協力し合っている。ひとつのグリーフシードで浄化できる穢れはひとり分。たったひとつで全員が助かる訳ではないが、グリーフシードを放置しておくわけにはいかない。魔女が産まれない世の中とはいえ、六千石町のように魔女の意思が使い魔を動かし、また魔獣と呼ばれる化け物が出てくるかもしれないのだ。

(だから私たちは魔法少女としての使命をまっとうし、自己の命よりも優先すべき行動を取ろうと思うの)

ゆう子は昨夜、マミとの電話でそんな話を聞いた。

グリーンシードは、ソウルジェムの成れの果て。ほとんどの魔法少女が円環の理によつて消滅しているこの世界では、新たにグリーンシードが見つかる可能性は極めて低い。

そして

（もしかしたら、これが最後のグリーンシードかもしれない）

とも聞かされた。

最後のグリーンシードを手に入れて誰かの穢れを浄化したとしても、それで命が助かるわけではなく、ただ延命するだけに過ぎない。ならば魔法少女としての運命を受け入れ、ひとつでも多く人々の幸せを守りたい。

そんなマミの想いを知ったゆう子は、ふたつ返事でグリーンシード探しを手伝うと約束した。

杏子たちに救われた自分にできることは、杏子たちの力になることだ。

だから今は、立ち止まってはいけない。自分だって同じ魔法少女なんだ。危険を避けてただ生き長らえるよりも、やらなきゃいけないことがある。足手まといと言われても、できることがあるかもしれない。

「杏子ちゃんの、力にならなきゃ」

ゆう子はそう決心を固めて、杏子の後を追っていった。

広いショッピングモールを抜けると、街の中心部を南北に走る大通りがある。先に行ってしまった杏子はまだ見つからないが、今日の探索ルートを考えるところの大通りを南へ向かうはずだ。杏子のトレードマークとも言えるミントグリーンのパーカーと長い赤髪のポニーテールを探すが、ゆう子の視界にそれらしき人影は見当たらなかった。(そんなに遠くまで行つてないと思うんだけどな……)

ゆう子がショッピングモールの中で立ち止まっていたのはほんの数分。人混みの中で見失ってしまうのは仕方ないが、この大通りまで出ても姿が見えないのは、もつと先まで行ってしまったのか。それともどこかで追い抜いてしまい、杏子はまだモールの中を探索しているのか。

携帯電話を使おうかとも思ったが、今日はふたりで行動する手筈だったので杏子の番号を聞いていなかったことに気付いた。

(困ったなあ、ひとりじゃ何もできないし……ああ、私のバカ)

杏子の言葉に圧倒され置いて行かれてしまったことを悔やんだ。このまま先に進むかショッピングモールに戻るか思案をしていると、急に後ろから誰かの視線を感じた。

「杏子ちゃん?」

振り返って周りを見渡すが、大通りの歩道にも、ショッピングモールを出入りする人

の中にも、杏子の姿は見当たらない。

（気のせいだったのかな）

この見滝原には杏子たち以外に知り合いはいないし、週末とはいえ六千石町の同級生らがこんなに遠くまで来ているとも考えにくい。ゆう子はあまり気にせず、ひとまずシヨツピングモールに戻ってみることにした。急いで追いかけてきたのに進む先に杏子が見えないのは、まだモール内を探索しているのか、途中で追い抜いてしまったのかもしれない。それにこのまま待ち合わせ場所の水上公園に戻っても時間はまだ早いし、今は少しでも早く杏子を見つけなければと思った。

そうしてシヨツピングモールに戻っていくゆう子を、大通りに架かる歩道橋から見下ろす人影があった。

ゆう子はシヨツピングモールの中に戻り、左右をキョロキョロしながら杏子を探して歩く。少し離れて、ゆう子の後を付いて来る人影があった。ゆう子が立ち止まって周りを見渡すとその人影も同じように立ち止まり、また歩き出せば同じように歩き出す。そうして視線の先にずっとゆう子を捉えたまま、近づくことも離れることもなく後ろを歩いてきた。初めのうちは気にならなかったが、徐々に突き刺さるような視線を背中に感じてきて

(やつぱり、誰かに見られてる?)

と後ろを振り返る。杏子が近くにいるのかと思ったがそうではなく、人混みの中からじつとゆう子を見つめる小さな少女がいた。10メートルほど離れたところから、明らかにゆう子だけを見て立ち止まっている幼い少女。行き交う人の流れの隙間から、お互いの目が合う。少女はすぐに体の向きを変えると、メイン通路から横に伸びる建物と建物の隙間の細い道へと入って行った。

(あんなに小さな子が、ひとりでどこに行くんだろう?)

少女が向かった先は従業員用の出入り口があるだけで、一般の客が通るような場所ではない。それに、家族連れが多い週末のショッピングモールとはいえ、小さな少女がひとりでいるのは変だった。

少女は出入り口の扉を開け、そのまま中に入ってしまった。

ゆう子は導かれるように後を追う。扉を開けると、薄暗い屋内には非常階段が設置されていて

タンタンタン

と少女が階段を上っていく足音が聞こえた。

階段は螺旋状になっていて、建物の上の方へ続いている。そこは窓も照明もなく非常灯の明かりがうつすら灯るだけで、まだ昼間だというのに外の賑やかなショッピング

モールとはまるで別世界のような不気味さが感じられた。少女の姿は見えないが、足音だけがゆう子の頭上から聞こえてくる。

「なんか怖いなあ」

ゆう子は両手を胸の前に合わせ、暗がりには怯えながら階段に足を踏み出した。

タン

タン

タン

ゆつくり、足元を確かめながら一段ずつ階段を上っていく。途中で踊り場のような場所もなく、ただ上の方へと螺旋状に続いていた。さらによく見ると、この階段には螺旋の中心に支柱がない。支えのない階段を歩くのは、まるで宙に浮いているような感覚だった。

ゆう子はぐるぐる回りながら上っていると、自分が今どれくらいの高さまで来たのかわからなくなってきた。それでも上の方からは、さっきの少女と思われる足音が聞こえてくる。

「おかしいな、どこまで上るんだろう」

この建物は3階建てのはずなのだが、もうそれ以上の高さまで来ているような気がした。入り口にあった非常灯の明かりも見えなくなり、周りは真っ暗だ。まるで道に迷っ

てしまったような不安に駆られていると、いつの間にか上から聞こえていた足音が途切れた。

氣付いてゆう子も立ち止まる。

そこは音の無い、沈黙の空間。

耳が痛いほどの、静寂な螺旋階段。

外の世界と完全に隔離されたような暗闇と静けさの中、ゆう子は恐怖で叫びたくなる
気持ちを抑えて、また足を踏み出した。

タン

タン

と、一歩ごとに響く自分の足音が今まで以上に不気味に鳴り渡る。

それからすぐに、ゆう子は足を止めた。永久に続くと思われた階段の頂上に、ようやく辿り着いたのだった。辿り着いたといっても、目の前には階段の最後に扉があるだけだった。踊り場もない、扉の周りに壁もない、長い長い螺旋階段の終わりは、ただ一枚の扉。その先には何もない。

扉の上には

【出口】

と書かれた案内灯が点いており、その薄明かりだけがぼんやりと扉を照らしている。

（……）に……入って行っちゃったのかな）

階段の終わりまで来たのにさっきの少女がいないので、きつとこの中にいるのだと思うしかなかった。あまりに不思議で不気味な状況にゆう子の鼓動は早く激しく、自分の身体が脈打つ感覚で自分自身が揺れているような気がした。なぜここまで少女を追いかけてきたのか、頭の中が混乱して考えがまとまらない。もはや後戻りも叶わない、そんな差し迫った恐怖感を抱きながらもゆう子は意を決して扉のノブを回し、冷たく重い扉を押し開けた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<http://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部 8話）

螺旋階段の行き止まり。

ゆう子は「出口」と書かれた案内灯の明かりが灯る扉を開けると、そこに広がっていたのは中世の舞踏会場のような大広間だった。高い天井からは豪華なカーテンが垂れ下がり、大きな鏡、キャンドル、壁掛け時計、そして中央には巨大なクリスマスツリーが煌びやかに飾り付けられている。さつきまでの真つ暗な階段とはまったく異なる部屋。というよりも、ここは見滝原市内のシヨツピングモールのはずだが、モール内の施設とは思えないような広い、広い空間。室内には誰もおらず、機械仕掛けの兵隊のようなブリキ人形がずらりと整列していた。

「シヨツピングモールにこんなところあったかな……？」

まるで昔の西洋の世界にタイムスリップしてしまったかのように、ゆう子は驚きと不安に包まれる。恐る恐る部屋の中に足を踏み入れると、後ろの扉が音もなく閉じられた。

「あの、誰かいますか？」

ゆう子が細々と声を出すも、返事は返つてこない。あの少女はどこへ消えてしまったのか。

すると突然、壁に掛けられている大きな時計が時を告げた。

ポーン

ポーン

ポーン……

見上げると、時計の針が12時を指している。不気味な鐘の音と共に、どこからともなく優美で軽快な曲が流れ始め、機械仕掛けの兵隊人形が

カタカタ

と揺れ始め、人形たちは一斉に目を開けた。

「ひゃっ」

ゆう子は何が何だかわからず、恐怖で足がすくんだ。ゆっくりと後ずさりしていくと、それらはまるで意思があるように動き出し、音楽に乗って踊り始めた。赤い服に黄色のズボン、王冠のような帽子と黒のブーツ、目は青く、鼻下と顎に髭を蓄えた機械人形は、カチャカチャと優雅に踊る。

「……はおとぎの国？ それにしては人形が怖いよ」

ステップを踏み、くるくると回り、隊列を組んだり入れ替えたりしながら踊るブリキ

の兵隊人形。しかしその人形たちはとても不気味で、おとぎの国という可愛らしいものではなかった。

やがて軽快な音楽がピタリと止み、同時に人形たちも動きを止めた。

辺りが一瞬、シンと静まり返ると……

機械の兵隊人形たちの口がガクン！ と大きく開いた。開いたというよりも顎の仕掛けが外れた感じで、顎から上は白骨化したドクロのような恐ろしい顔になった。

動きを止めていた人形たちはギョロつとゆう子に目を向け、そのまま一列になつて近づいてきた。

もうこれは、現実の世界ではない。

人形が動き、踊り、ゆう子に迫つて来た。

ゆう子は慌てて引き返そうとするが、この部屋に入つて来た扉が見当たらない。

「ええっ!? どうなつてるの?」

見当たらないのではなく、扉は消えてしまつていた。カチャカチャと近寄つてくる兵隊人形たちは、ゆう子に向けてゲベル銃のような古いライフル銃を構えた。おもちゃの銃のようだが、ゆう子は反射的に身を屈めた。

ダダーン!

と、銃撃音が鳴り響き、銃弾がゆう子の頭の上をかすめる。まるで本物の銃撃だった。

人形たちが放った銃弾は壁に掛けられている大きな鏡に当たり、鏡面はバラバラに割れてしまった。

ゆう子は目を見開き、割れた鏡を見て青褪めた。所々割れ残った鏡面に、キャンドルの光が万華鏡のように反射している。

幻想的な部屋とは裏腹に、ここはおとぎの国などではない。

『これは魔法の境界だ！』

ゆう子の頭の中に声が聞こえた。

『ゆう子、早く魔法少女になるんだ』

声の主はキュウベえだった。姿は見えないが、キュウベえの声がテレパシーで伝わってくる。

「頭の中に直接声が……？ でもそんなこと言ったって、どうすればいいの？」

人形の銃撃が何発か飛び交う中で、身を低くして逃げまどいながらゆう子が叫ぶ。

『左耳のソウルジェムを掲げるんだ、早く！』

「い、い、い？」

そうやって左耳のイヤリングを外し両手で高く掲げると、ゆう子は赤紫色とオレンジ色の光に包まれ

胸元には大きくふたつに割れた赤紫色のリボン

白ベースに赤い縦ラインの入った燕尾服のようなジャケット
赤紫色のショートパンツ

黒いニーソックスに赤紫色のロングブーツ

腰の後ろには短槍を装着した

魔法少女へと姿を変えた。再び左耳のイヤリングに納まったソウルジェムが、赤紫色に輝いている。

「やった」

ゆう子は初めて自分で変身できたことに嬉しさを見せるが

『気を付けて、せいつらはおもちゃの人形なんかじゃないよ』

キュウベエの言葉でハツとすると、兵隊人形たちがゲベル銃で狙いを定めている。

ゆう子はすぐにまばたきで瞬間移動し、一瞬で人形たちの真後ろに姿を現すと

「えいつー！」

つと声を出して、短槍を片手で振り下ろし人形一体を叩き潰した。潰れた人形は壊れるというよりも、ヘナヘナと足元に沈むように消えてしまった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mangobow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く (第2部

9話)

明らかに異常な光景だった。おとぎ話のような舞踏会場に現れたおもちゃの兵隊人形が動き、踊り、ゆう子に襲いかかってくる。

『ゆう子、そいつらはきつと使い魔だ。グリーンフシードが近くにあるかもしれないよ』
キュウベえがテレパシーで言葉を送ってくる。どこにいいのか姿が見えないが、きつと近くにいるゆう子を見ているのだろう。ゆう子は人形たちの銃撃をまばたきで躲し「グリーンフシードがあるって言われても、私どうすればいいの?」

と問いかける。ママや杏子から、グリーンフシードを見つけたらどうするのか何も聞いていなかった。

『まずはその兵隊たちを何とかしないと。話はそれからだ』

キュウベえは戦いを助けることはない。いつもの「詳しいことは後回し」な物言いに終始しているが、ゆう子にとってはこれが魔法少女として初仕事のようなもの。キュウベえに言われるまま

「わかった!」

と言つて人形をもう一体叩き潰した。ゆう子の膝丈くらいの大きさの兵隊人形は、短槍で叩くには丁度良い相手だった。まばたきで相手の攻撃を躲しながら一瞬で間合いを詰めて、叩いては離れ、叩いては離れてのヒットアンドアウェイは、ゆう子の能力を最大限に活かした戦法と言える。

（杏子ちゃん、私だつてちゃんと戦えるんだから！）

20体は居たと思われる兵隊人形をあつという間に半分ほど退治して、形勢はゆう子に有利に見えた。

しかし、だんだんゆう子の動きが遅れてきた。まばたきをする度に姿を消してはいるが、消えるタイミングが徐々に遅くなつてきている。人形たちはゆう子に狙いを定めてからゲベル銃を発射するので、ゆう子は狙われた瞬間にまばたきをする。が、まばたきをしてから瞬間移動が始動するまでに、わずかな遅れが生じていた。

（あれ？　なんだか上手く動けなくなつてる？）

ゆう子もその一瞬の遅れに気付く。気付くが、その時にはもう人形の銃撃が身体を掠つていた。おもちゃのゲベル銃のように見えるが、発射されている弾丸は本物と変わらない威力を持っていて、姿が消える瞬間のゆう子の頬や肩に一直線の掠り傷を負わせる。兵隊人形の狙いはやけに正確で、ゆう子の顔付近を執拗に傷付け続けた。

（痛い！　もつと離れないと当たり前そう）

人形との間合いをどんどん離し、ほとんど壁面に追いやられながら銃弾を躲していくが、ゆう子の瞬間移動は遅くなる一方だった。遂に一発の銃弾に肩を貫かれ、ゆう子はそのままよろめきながらクリスマスツリーの台座の裏に身を隠してしゃがみこんだ。銃創を負った左肩からは真つ赤な血が溢れ、激痛で腕を上げることができない。魔法少女としての治癒能力で出血はすぐに止まったが、恐怖で身体に力が入らなくなってしまう。

ツリーの台座の向こうからは、カチャカチャと音を立てて兵隊人形たちが迫ってくる。出口は無いし、瞬間移動も遅い。

「もう、逃げられない……」

恐怖と戦慄で、ゆう子は目を瞑って顔を伏せた。

兵隊人形の足音が真横で止まる。恐る恐る目を開くと、ゆう子の頭を狙った銃口が、もう目と鼻の先に向けられていた。

「いやー!!」

と叫び声をあげた瞬間、目の前の人形は鈍い音を立てて何かに突き刺され、そのまま音もなくへなへなと消えてしまった。床に突き刺さったのは、大きな赤い槍。

「まったく、見てらんねえっつーの」

見慣れた赤いロングブーツでゆう子のすぐそばに降り立ったのは杏子だった。

「杏子ちゃん！」

「あんなのもまともに相手できないくせに、ひとりで何しようってんだよ」

槍に手を掛け、ゆう子を見降ろしながら呆れたように言った。

「まあ話は後だ。そこで大人しく座ってな」

杏子はニヤつと余裕の笑みを浮かべると槍を引き抜き、高さ3メートル以上はあるだろウクリスマスツリーを大きなジャンプで飛び越えた。そのまま空中で槍を多節棍のように分断し、ゆう子に迫っていた兵隊人形を水平に薙ぎ払う。動きの鈍い人形たちは、鞭のようにしならせた杏子の槍で一気に打ち払われた。

辛うじて残った最後の一体が杏子に向けてゲベール銃を発射してくる。銃弾は正確に杏子の胸の辺りに飛来するが、杏子は槍の柄の部分で簡単に銃弾を弾き返し、一瞬で槍を元の状態に戻した。ツリーの台座から大きく離れた場所に着地した杏子は、穂先を相手に向けて槍を構える。

「ゆう子！」

杏子は兵隊人形の向こう側に隠れているゆう子呼び

「見てな」

割れた鏡に映るゆう子を見た。ゆう子は台座とツリーの隙間からチラつと覗くと、兵隊人形が杏子にゲベール銃を向けていた。

「杏子ちゃん、危ない！」

ダーン！

と銃声が響いた瞬間に杏子は目を見開き、槍の穂の部分で銃弾を弾き返した。

「す、すごい」

「へっ、こんな下等な使い魔、瞬殺つしよ」

目線だけを鏡越しにゆう子に向け、口元から八重歯をのぞかせると、ゆらつと流れるような動きで真横に移動する。それに釣られ、兵隊人形が銃口で杏子を追いかけた次の瞬間、赤い槍が矢のように人形を貫いた。

杏子は目にも止まらぬ速さで槍を投げ、人形を攻撃したのだった。その威力は相当なもので、人形を木端微塵に粉碎した槍はそのまま部屋の壁まで到達し、大きなカーテンの垂れ下がる壁も激しく打ち砕いている。槍の刺さる壁の隙間からは、白い光が漏れていた。

「うわー……」

ゆう子は感嘆の声を出す。

『さすが杏子だね。また力を付けたんじゃないかい？』

キュウベえも感心しているようだった。

「ま、それでもほむらの矢の威力には勝てねーけどな」

へへつと満更でもない表情を浮かべて杏子は壁に刺さった槍を取ると、クルクルと廻して槍柄を床に立てた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「アニメに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部 10話）

兵隊人形をすべて退治した杏子は念の為に辺りを見回すが、もう残っている人形はいないようだった。

「大丈夫か？ ゆう子」

クリスマスツリーと台座の隙間から顔をのぞかせるゆう子に向かって問いかけた。ゆう子の身体の損傷は大したことはなく、肩の傷もすでに魔力による修復が済んでいる。ただ、銃弾をまともに受けた上着の肩の部分には、生々しい貫通痕が残っていた。

「杏子ちゃん、ありがとう。やっぱり私ひとりじゃ何もできないね」

「当たり前だろ、お前はまだ半人前の魔法少女なんだから」

杏子のもっともな言葉に、ゆう子はシュンとしてしまった。まだ魔法少女となって数日、実戦経験も浅いうえに戦いの手ほどきを何も受けていないゆう子は、魔法少女としては半人前以下だった。ションボリとしているゆう子を尻目に、杏子は部屋の壁にできた裂け目に近づき

「……は魔法の結界だ。この裂け目から外に出られるはずだな」

小さな壁の裂け目に向けて「よっ」と槍を突き通す。頑丈そうな壁はボロボロと脆く崩れて、外に抜けられそうな穴が開いた。

杏子は黙って下を向いているゆう子を見て

「いつまでもシヨボくれてんじゃねえぞ、ボンクラあ」

と言つて槍を肩に担ぐと、クルつと背を向けた。

「でも、その半人前の魔法少女の面倒を見るのが今回のあたしの役目だった。ひとりにして悪かったな」

「え？」

「さっきのは使い魔だから良かったけど、この間みたいに魔獣なんて出てきたら危なかった。ゆう子をグリーンフシードから遠ざけた方が安全だと思っただけ、言い方が悪かった。あたしがどうかしてたよ」

背を向けたまま、言葉が続けた。

「魔法少女はさ、こうしていつも危険と隣り合わせなんだ。もし戦いに敗れて死ぬようなことがあるば、その魔法少女は世間から忘れられる存在になっちゃうんだよ。アンタには失っちゃいけない大切なモンがたくさんある。失つてはいけない家族がいる。だからあたしが守ってやらなきゃいけないかったんだ」

「杏子ちゃん」

「ゆう子の覚悟は今の戦いでわかったよ。けど、絶対に死ぬんじゃない。いや、あたしが絶対に死なせない。……繰り返しじゃないんだ」

ゆう子には、最後の言葉の意味はわからなかった。

「うん。でもね、杏子ちゃんも絶対に死んじゃダメだよ。杏子ちゃんにだって大切なものはたくさんあるんだから。杏子ちゃんが死んじゃったら悲しむ人がいるんだから」

「はは、あたしには失うモンなんて何もないさ。けど、あたしは強い。どんなヤツにも決して負けない」

「違うよー」

ゆう子は強く否定した。

「杏子ちゃんは強いよ、どんな相手にも負けないと思う。でも、ソウルジェムの穢れには勝てないんですよ？ グリーフシードが見つかったても、助からないかもしれないんですよ？ さつき杏子ちゃんが言った、死ぬことを覚悟してると、そういうことなんだよね」

悲しそうな目に涙を浮かべる。ゆう子は半人前の魔法少女でも、自分たちの置かれている状況がわかっていた。

「ねえ杏子ちゃん、私が叶えてもらった願い、覚えてる？」

——（杏子ちゃんと、お友達でいたい）

「私は最後まで、叶えてもらった願いを大切にしたい。私のたった一度の奇跡を無駄に
したくない。だからお願い……失うものがないなんて言わないで。死ぬ覚悟があるな
んて、諦めたこと言わないで」

頬に涙がポロポロと流れた。

「お、おい……ゆう子」

「私、本当はすごく怖い。この間も、今も、怖くて仕方ないの。私には魔法少女なんて
向いていないんだと思う。なんの取り柄もない普通の中学生だったんだもん。でも後
悔はしてないよ。叶えてもらった願いは、とても大切なものだから」

涙を浮かべたままニコつと笑った。溢れた感情が、素直な言葉と涙で吐き出された。

「つたくもう、調子狂うよなあ、ホント」

杏子は頭をポリポリと掻きながら

「なんかさ、前にも似たようなヤツが居たような気がするんだよな。誰だったかぜんぜ
ん思い出せないんだけど、そうやって素直で真つすぐで弱つちいんだけど、心はとても
強いヤツだった」

「弱つちい？」

「そ、ゆう子と一緒だな」

あはは、つと笑う。

弱つちいんだけど強いヤツ……

杏子は記憶の彼方の誰かを思い出すことはできなかった。ただなんとなく、前にそんな仲間がいたような……気がした。

「おいキュウベえ、その辺にいまするんだろ？」

杏子は辺りを見回しながらキュウベえを呼んだ。

「え？ 近くにいまするの？」

「あたしはキュウベえに呼ばれてここに来たんだ。アイツが呼ばなかったら間に合わなかったかもしれない」

向こうの壁にかかるカーテンの隙間からヒョコつと現れたキュウベえに言った。どこから入って来たのか、いつからいたのか、大きな白いしっぽを左右に振りながら小さな足をトコトコ歩ませ近づいてきた。

「僕だつてたまたま居合わせただけさ。魔女の結界を探す能力は僕にはないからね。それにしてもここが魔女の結界だとしたら、さっきの使い魔がいなくなったのに現実世界に戻らないのはおかしいんじゃないかい？」

言われて杏子はハっとした。魔女や使い魔が住処とする特殊な閉鎖空間である結界

は、その生み主の消滅と共に消えてなくなるはずだった。しかし今、結界は残ったまま
で現実世界に戻る気配がない。

「まだ、使い魔が残ってるのか？」

一気に緊張が走り、杏子は心までも冷え切るような悪寒に襲われた。結界内を見渡す
が、兵隊の人形たちはすべて消え失せているし、ゆう子とキュウベえの他には誰もいな
い。静かな空間に自分の鼓動の音が響いている。

「早く、ここを出ようぜ。何か……嫌な予感がする」

さつき杏子が開けた結界の亀裂は残ったままなので、そこからこの空間を脱出できる
はずだ。杏子の呼びかけにゆう子とキュウベえは結界の亀裂に向かう。

兵隊人形の銃弾で割れた鏡にゆう子が映った。

不規則に歪んでいる鏡には……

白い影のようなものが舞っていた。影はゆう子の後ろに張り付き追っている。

「ゆう子、走れ！」

杏子は大声で叫んだ。叫ぶと同時に視線をゆう子に向けるが、そこに白い影は見えな
い。

「どうしたの、杏子ちゃん」

ゆう子は言われるままに走り出す。

「いいから早く、その亀裂から外に出るんだ！」

と言って杏子も亀裂に向かつて走り出した。ゆう子の後ろには何もいないが、さつきのは見間違いいではない。槍を強く握りしめ、いつでも迎撃できるように構えた。

ゆう子が鏡の前を通り過ぎたその時、

鏡の割れ面の隙間から白い人影のようなものが飛び出してきた。立体的な真っ白い影がクルクルと水平に横回転しながらゆう子に迫る。

(ダメだ、間に合わない！)

亀裂に向かうゆう子も気配に気付き後ろを振り向くと、白い影はもうすぐ目の前にいる。思わず両手で頭を抱えるように身を伏せ、影の突進をギリギリで躲した。ゆう子の頭上をすり抜けた白い影は空中で止まり、回転をやめて人の形を見せた。

それは小さな少女のようなシルエツトで、まるで人の影だけが真っ白く抜け出た感じだった。時折、クルリ、クルリと素早く横回転をしながら浮いている影は目も口も鼻も何もない。

杏子はすぐに影とゆう子の間に割って入り

「先に行きな、コイツはあたしが引き受けた」

と言って槍の穂先を向け身構えた。

「杏子ちゃん、私も一緒に戦うよ」

「いや、コイツは……強い。キュウベえと先にここを出るんだ」

杏子は構えたまま、後ろを振り向かずしに声を返す。

「杏子ちゃんひとりで大丈夫なの？」

「あたしには失つちやいけないモンがあるみたいだからな。だから、あたしは強い。どんなヤツにも決して負けない」

精悍で、凜とした表情をした。背を向けられているゆう子には見えなかったが、杏子の声が優しく力強く聞こえた。

「わかった。杏子ちゃんは強いもんね。絶対に負けないよね」

「ああ、心配すんな」

その言葉を聞いてゆう子は立ち上がり、すぐに壁の亀裂に飛び込んだ。キュウベえも黙って後に続く。白い影はすんなりとゆう子たちを外へ見逃した。

ゆう子の足音が途切れ、この異空間には杏子と白い影だけが残った。

「よお、アンタ最初からあたしを狙ってただろ」

杏子が話しかけると、影はまるで応答するようにクルリと回転した。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mnbow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

11話）

白い影は杏子の半分ほどの背丈で両足をピンと伸ばし、あまり長くない髪をツインテールに結んだシルエットをしている。影だけなので表情はなく、スカートを穿いているような恰好で両腕を横に広げクルリと1回転した。

（さっきの使い魔とは比べものにならないくらい魔力を感じる）

幼い少女のようなシルエットが放つ強い魔力を前に、杏子は先制攻撃を躊躇っていた。

（つーか、コイツは使い魔なのか？ こんなに小さいクセに、この魔力の波動は超ド級の魔女レベルだぞ）

杏子の額に汗が滲む。一突きの槍も合わせる前から、対峙しているだけで白い影の魔力に気圧されていた。今まで幾度も使い魔や魔女と戦ってきた杏子も、ここまで強い魔力を発する相手に出会ったのは初めてだった。

だから、敢えてゆう子を逃がした。ひとりよりもふたりで戦う方が有利かもしれないが、半人前の魔法少女であるゆう子を守りながら戦うのは逆に不利と考えた。何より、

この影は最初から自分を狙っているような気がしていた。ゆう子への稚拙な攻撃は簡単に躲されていたが、杏子と対峙してから発している魔力の波動はとても強く、殺気がありありと感じられる。

その殺気を跳ね返すように、先に動いたのは杏子だった。

槍を構えた状態から口の中で

「ロツソ・ファンタズマ」

と小さく呟くと、杏子の身体からもうひとりの杏子が抜け出た。それは影でも幻でもない、実体ある杏子がさらにもうひとり、ふたりと、全部で4人の分身を生み出した。5人になったそれぞれの杏子は同じように槍を構えると、ふたりは跳躍し高く舞い上がり、白い影を目がけて槍を振り下ろしていく。残りのふたりは左右に分かれてステツプしてから、挟み撃ちするように白い影の横から槍を薙ぎ払った。本体となる杏子は足元から何本もの槍を出現させ、それを白い影に向けて勢いよく発射させた。

上・横・正面からの3方向による同時攻撃。

これは杏子の魔法少女としての固有魔法、幻惑攻撃だった。杏子は最初から全力を出した。

4人の攻撃と遠隔操作で射出された何本もの槍は、同時に白い影を打ちのめした。白い影は避けることもせずすべての攻撃を喰らって壁に激突し、槍で貫かれた状態で壁

に磔になった。

杏子は攻撃の手を緩めず、今度は分身の4人が足元から槍を大量に出現させて投射し、一斉に突き刺す。まるでハリネズミのように何十本もの槍が突き刺さったところに、杏子自身が槍を巨大化させ、突進して振り下ろし壁ごと粉碎した。

粉々に砕けた壁がボロボロと崩れ落ち、白い影は突き刺さった槍と一緒に壁の破片に埋もれてしまった。

が、杏子は用心して後ろに飛び退き距離をとる。分身の4人と一緒に槍を向けて構えると、崩れ積もった破片の山から欠片がひとつコトリと転がった。

「マズいー」

と叫んだ瞬間、白い影に突き刺さっていた何本もの槍が杏子たちに向かって矢のように飛んできた。分身杏子たちは皆 避ける間もなく身体ごと胸のソウルジエムを貫かれ、鮮血をほとぼしらせながら消滅した。杏子自身は辛うじて身を引いたが、左の腕を弾かれ、肩から先が千切れ飛んだ。

「なっ……いー」

一瞬で分身4人は消滅し、杏子も重傷を負ってしまった。千切れ飛んだ腕が、握っていた槍と一緒に後ろのほうへ飛んでいきカラカラと音を立てて止まる。

杏子は苦痛に歪んだ顔で弾かれた左肩を押さえ、必死で止血と治療に魔力を充てた。

八重歯が唇を噛み、傷みで肩が震え、立っているのがやっとだった。

突き刺さった槍をすべて反射した白い影は再び宙に浮くと、クルリと回転した。まるでダメージを受けていないように平然と、もう一度クルリと回転する。

すると突然、今までであった舞踏会場のような空間が真つ暗に変わり、壁もカーテンもツリーも、足元の床もスツと消えてしまい杏子は暗闇の中に落下した。異空間が異空間に変換され、そこはゆう子が上つて来た螺旋階段の部屋になった。部屋といっても、真つ暗で壁も天井も何もない、長い螺旋階段が伸びているだけの空間を杏子はひたすら落ちていく。

「くそっ！ これ以上は治癒できない……」

杏子は血で赤く染まった右手を伸ばして螺旋階段の手すりを掴み、階段の足場に乗り掛かった。千切れた左腕の出血は止まったが、腕の再生ができない。杏子は治癒能力に長けた魔法少女ではないが、時間をかければその程度の肉體修復はできる。

しかし、

(これ以上、魔力を使うとソウルジェムが限界になっちゃう)

先の分身能力は杏子の最大の魔法だが、同時に魔力の消費も激しい。強力な魔法を使い、さらに腕の治癒でも相当の魔力を使い、杏子のソウルジェムはもう限界に近かった。階段の手すりに掴まったはいいが、すでに魔法少女を維持することも限界に達してい

る。

そこへ白い影が、螺旋階段の上から物凄い速さで降りてきた。杏子の目と鼻の先、ほとんど顔がくつつきそうな距離まで近づいてくると、そこでピタリと止まる。それまでシルエツトだけだったはずの顔に口だけが現れ、ニヤリと笑った。

「く……」

片腕を失い魔力も尽き、杏子はもう戦えなかった。胸のソウルジェムは黒い濁りがゆらゆらと漂っている。これ以上魔法の力を使えば穢れが溢れる状況で、もう手の打ちようがなかった。

「……殺れよ」

もはや逃げることも叶わぬと悟った杏子は身体力を抜き、死を覚悟した。白い影は不気味な笑みを浮かべて槍を振りかぶった。

（クソ！ またあたしの槍で！）

弾き飛ばされた左腕が掴んだままの杏子の槍が、胸のソウルジェム目がけて突き出される。鋭利な槍の穂先が一気に振り下ろされ、杏子の胸を貫いた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mangobou.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

12話）

「……ちゃん？」

幼い少女と手を繋ぎ歩いていたマミは足を止めた。

「くるみちゃん？」

小さな手をピクリと反応させて、くるみはマミを見上げた。

「なあに？」

ニコリと笑顔を零してくるみは返してきた。

「おうちはまだ遠いのかな？」

オフィス街の公園を出てからずっと歩いてきたが、くるみの家にはまだ着かない。週末でひと気の少ないビルとビルの間を歩き続けている間、時折くるみが「こっち」と道案内をしてくるが、それでも30分ほどは歩いてきただろうか。幼い少女がひとりで遊びに出たにしてはずいぶんと遠くまで来たものだ、とマミは少し怪しみながら

「おうちの場所は覚えてるのよ、ね？」

と尋ねると

「うん、もうちよつとだよ」

と言つてママの手を引き歩き出す。そのうちにオフィス街を抜け、幹線道路を渡り、小高い丘へと続く道を通つていくと、壁全体が白と黒の市松模様で覆われた大きな建物が目に入つてきた。周囲に他の建物はない。道の端に生い茂る芝生や青い空のコントラストに対して浮き出るような感じで建つ奇抜な建物はあまりに不自然で、長らく見滝原に住んでいるママもこんな建物があつたのかと驚いたほどだった。

「ここが、くるみちゃんの家なの？」

「そうだよ」

くるみは建物の方を指さし

「中にわたしのお友達も来てるから、お姉ちゃんも一緒に遊んでいこうよ」

言いながら力いっぱいママのことを引っ張つた。

「あ、ちよつとくるみちゃん……」

小さな少女の精いっぱいのに力に引っ張られて、ママはヨロヨロと付き従う。こんなところで遊んでいる場合ではないのだが、くるみの無邪気な笑顔についつい抵抗できなくなつていた。

そんな時、ママの携帯電話が鳴つた。

「ごめんね」

手を振りほどこいて立ち止まったママが携帯を取ると、着信は天生目ゆう子からだった。ママは「しく」と人差し指を口の前に立てて静かにするようくるみに合図を送り、携帯の通話ボタンを押して

「もしもし、ゆう子ちゃん？」

と話し始めた。それを上目で見ていたくるみは、拗ねたような恨めしそうな顔でママを見つめている。

「一体どうしたの？ 落ち着いて。ええ、ええ、……佐倉さんが……そう。で、ゆう子ちゃんは今どこにいるの？」

ママの表情が徐々に険しくなっていく。

「わかった。今すぐそっちに行くから、キュウベえと一緒に待つてちょうだい」
そう言って通話を終えると

「くるみちゃん、お姉ちゃんは用事ができちゃったから遊べなくなっちゃったの、ごめんね」

携帯電話をしまい、身体を屈めて申し訳なさそうにくるみに伝えた。くるみは上目のままママを見つめ

「ふうん、じゃあしょうがないね」

と素直に聞き分け

「せっかく楽しい遊びがあるのに」

ふふふつと笑いながら市松模様の建物に横目を移して呟いた。

「それじゃ今度、時間があるときに遊びに来てもいいかしら」

ママは「約束ね」と言つて右手の小指を差し出し、くるみの小指を絡めて

「指きりげんまん 嘘ついたら はりせんぼん飲ます」

指きりの約束を交わした。くるみは案外それで満足したのか、

「それじゃ今度ね」

幼い笑顔を残して建物の入り口に向かって走つて行つた。ママはそのうしろ姿を見つめ、くるみが建物のドアを開けて中に入つて行くのを見てからシヨツピングモールの方角へと足を向けた。

ゆう子からの電話は、魔女の結界を見つけ、使い魔と戦い、今は杏子ひとりで戦つてゐるという内容だった。自分は杏子に促されてキュウベえと結界を抜け、シヨツピングモールの中で電話をかけてゐるという。杏子はひとりで平気だと言つていたが、「強い敵」を相手に万が一のことがないわけでもないと思ひ、すぐにママに連絡をしてきたのだつた。

話を聞いたママは「佐倉さんらしい」と思つた。ゆう子の身の安全を優先したのでらう。それに、ゆう子と一緒に戦うよりも、自分ひとりの方が戦いやすいと考えたのかも

しれない。杏子なら簡単にやられてしまうことはないだろうが、確かに万が一のこともあり得るし、魔法の結界があつたのなら、そこからグリーンフィールドへの手がかりも掴めるかもしれない。

くるみも家まで送り届けることができたし、ここからは迷子少女の面倒を見る優しいお姉さんから、この街を守り、皆を助ける強い魔法少女へと心を切り替え、マミは足を速めた。

マミが背を向けた建物からドアの閉まる音が聞こえた。そして明かりの点いていない市松模様の建物の中から

「あなた、佐倉さんというのね。で、さっきのがお友達のバママさん。ゆう子ちゃんていうのもお友達なのかな」

と静かな声が漏れてきた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部

13話）

マミとの通話を終えたゆう子は、キュウベえと一緒にモール内の建物の前にいた。魔法少女の結界を抜け出した先は裏口の扉で、そこからメイン通路に出てすぐに電話をかけ、マミの到着を待つことにした。

「ねえキュウベえ、杏子ちゃんは大丈夫だよ」

「さあ、どうかな。さっきの白い影が放っていた魔力の波動はとても強かったからね。そう、例えるならワルプルギスの夜と同等か、それ以上か」

「ワルプルギスの夜？」

「数か月前にこの街に現れた、最強最悪の魔法少女だよ。杏子たちが束になっても敵わない相手だ」

ワルプルギスの夜、それは舞台装置の魔法少女。かつて見滝原市に現れた史上最強の魔法少女は未曾有の大災害として君臨したが、ひとりの魔法少女の手によって消滅していた。

「そんなの相手に杏子ちゃんひとりでは戦えるわけないよ。やっぱり私も戻らなきゃ」

「いや、やめておいた方がいい。君の力じゃ杏子の足手まといになるだけだ。それより

……」

キュウベえは引き返そうとするゆう子を制し、何か気になった様子で問いかけた。

「さっきの使い魔との戦い、途中から君の移動能力がおかしかったね。もしかしてソウルジェムに穢れが蓄積されているせいじゃないのかい？」

「え？ 私のソウルジェム？」

ゆう子は左耳のイヤリングにはまるソウルジェムをキュウベえに見せた。ジェムは鮮やかな赤紫色を放っており、黒い陰りのようなものはまったく混じっていないかった。小さな紅い瞳でソウルジェムを見つめたキュウベえは

「濁りのない、綺麗なジェムのままだね。むしろ綺麗すぎるくらいだ」

と、何か腑に落ちないように言った。

「魔法少女になりたての君は、魔力もそこまで強くないはずだ。いくらかの穢れが蓄積されたせいで魔力のコントロールが鈍ったのかと思っただけ、そうではないらしい」

もともと魔法少女としての素質が高かったわけではないゆう子は、魔力の限界もまだ低い。半人前以下の魔法少女があれば、能力を多用すれば、少しくらいの穢れが蓄積されてもおかしくないが、ゆう子のソウルジェムはあまりに綺麗だった。ゆう子はソウルジェムを耳に戻し

「そういえばあの時、だんだん意識が遠くなっていっていく感じがして、とても気分が悪かつ

たつていうか、自分の感覚が薄れていくような気がしてたの。どうしてだろう」

戦いの最中に感じていた違和感を思い出した。

「今は何ともないのかい?」

「今は平気、かな。それよりも杏子ちゃんのが心配で……」

ゆう子は早くマミが到着しないかと辺りをキョロキョロするが、その姿はどこにも見当たらなかった。それもそのはず、マミはショッピングモールからかなり離れた所だったので、電話を受けてから数分で辿り着ける距離ではなかった。杏子を残して脱出した今はマミの到着を待つのが最善と分かっているが、どうも胸騒ぎがしてならない。あの杏子が負けてしまうとは考えられないが、キユウベえの言う最強最悪の魔女と同等かそれ以上かという言葉に、不安は拭えなかった。

「キユウベえ、魔法少女も死んじやうことはあるの?」

ゆう子は不吉と分かっているも杏子の身が気になり、つい聞いてみた。

「君たちの考える『死』の定義で言うならば、魔法少女も死ぬことはあるさ。1番確実な死はソウルジェムの破壊。ソウルジェムが碎ければ、どんなに肉体が無事でも確実に死ぬことになる。その宝珠には君たちの魂が宿っているからね」

キユウベえの目線に釣られて、ゆう子も自分の左耳に指を当てた。

「魂という言い方は曖昧だけど、つまりは生命そのものがソウルジェムに移し替えられ

ているんだ。だから君たちの肉体はただの飾りで、どんなに激しく傷付けられても、心臓を破られても、ありつたけの血を抜かれても、魔力で修復すれば死ぬことはない」

ただし、とキュウベえは付け加えて

「魔法少女の魔力には限界があるからね、誰でも無限に魔力を使えるわけじゃない。そして魔力の消費は減算ではなく、穢れの蓄積という形で加算されていく。穢れが限界まで蓄積された状態で魔力を行使すれば、ソウルジェムはグリーンシードへと変化し、円環の理によつて消滅するのが君たちの運命だ。そういう意味では「魔力の限界」が「死」と捉えることもできる」

ソウルジェムの崩壊、または魔力の限界が魔法少女の「死」

人間の定義からするとこの考え方が妥当だ、とキュウベえは説明した。グリーンフィードが手に入らない今は蓄積された穢れを吸い出すことができないので、杏子たちの魔力には限界がある。ましてや先日を使い魔や魔獣との戦いで魔力を使っている杏子が溜めた穢れは相当な量といつてもいい。

「杏子はとても強い魔法少女だけど、その分 魔力の消費も大きい。強い魔力を使えば穢れの蓄積も多くなるからね、言うなれば諸刃の剣ってわけだ」

「じゃあ杏子ちゃんは、あとのくくらい戦えるの？」

「彼女のソウルジェムを見ないことには何とも言えないけど、まっさらな状態から全

力で戦えるのは2回がせいぜいだ。普通はね」

キユウベえの見立てでは、先日の六千石町での使い魔と無花果の魔獣、そしてさつき
のブリキの兵隊人形、杏子がどれだけ本気を出していたかわからないが、一度も穢れの
浄化をせずに戦い続けているとすれば、すでに全力2回に相当する魔力を使っているか
もしれないそうだった。杏子くらいのベテランになれば自分のソウルジエムがどれだ
けの穢れを溜めているかわかるから、ある程度はセーブして戦うこともできるが

「魔力を抑えて勝てる相手には見えなかったね」

ワルプルギスの夜に匹敵する魔力を持つ相手に、手加減して勝てるはずがない。もち
ろん杏子は全力で戦うだろう。全力で戦った末に、魔力の限界を超えて「死」ぬか、ソ
ウルジエムを砕かれ「死」ぬか、はたまた逃げ延びることができるか……

おそらく、ひとりで勝つのは無理だ、とキユウベえは思っていた。

「どちらにしても、君を逃がす選択をしたのは杏子の好判断だ。あのまま君と一緒に
戦っていたら、間違いなく杏子は命を落とすことになっただろうからね」

杏子が負ければ、ゆう子ひとりでは絶対に勝てない。強大な相手を前に、杏子はそう
判断してひとり残った。

「だから今、あそこに戻ろうなんて考えは起こさないことだ。杏子は君を守るために余
計な魔力を使う羽目になるからね」

残酷な言葉だが、それが事実なのはゆう子にもわかっていた。魔法少女として未熟な自分が恨めしかった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「アニメに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部 14話）

螺旋階段に長槍が突き刺さり、杏子の魔法少女が解けた。胸の真ん中、ちようど杏子がソウルジェムを装着していたところを大きな穂が貫き、そのまま階段の足場まで串刺しになった。槍の穂先からは赤い血が滴り、階下からはピチャピチャと鮮血が垂れ落ちる音が聞こえた。

白と黒の市松模様をした螺旋階段。螺旋といっても綺麗な円形を保っておらず、いびつなうねりでそびえる不気味な階段。真っ赤に染まった杏子の身体と、階下に溜まる血の澱みが、暗闇の中で黒く映えていた。

「あれ？ もう終わっちゃったの？」

「うふふ、この子すごく強かったよ。こんなに強い魔法少女に会ったのは初めて」
「でも、死んじゃったね」

「うん、死んじゃった」

「もうひとりの子はあるより強くなかったけどね」

「あれはあなたが逃がしちゃったじゃない」

「ふふふ、また今度遊んであげるからいいの。それに、もうひとり魔法少女を見つけたのよ」

「あら、あなた独り占めするつもり？」

「大丈夫よ、お姉ちゃんにも分けてあげるから」

幼い少女ふたりの声が、明かりの点いていない白黒の建物の中で交錯した。

片腕を失くし、胸を貫かれた杏子はピクリとも動かない。弾き飛ばされた左腕は槍を掴んだまま、無残な姿を晒していた。

ここはマミがくるみと別れた場所。小高い丘に建つ、白と黒の市松模様の建物。都市開発が進められている近未来型都市の見滝原には似合わない奇抜なデザインは、通りかかる人の目に付きそうであるが、誰もその建物に目を向けることはなかった。

シヨップینگモールでゆう子と合流したマミは、電話では伝えきれなかった経緯を聞いていた。使い魔と思われるブリキの兵隊人形、ワルプルギスの夜に匹敵する強い魔力を持つ白い影、そして未だに戻らない杏子。ゆう子が魔女の結界を抜け出してから、すでに1時間近くが経過していた。マミが来るまでの間、ゆう子はずっと裏口の扉を見張り杏子が戻るのを待っていたが、杏子はもちろん他の誰も扉から出てくることはなかった。

「あの扉です」

ゆう子は薄暗い裏口にある扉を指さした。従業員用の出入り口にしが見えない鉄の扉は閉ざされたままで、人の出入りもなければ裏口の通路に入る者もいなかった。ママはゆっくりと扉に近づき、ドアノブに触れた。

ガタン

つと重い扉を開き中に入ると、そこには3階まで伸びる折り返しの階段が設置されている。階段の足場には明かりが灯り、壁に貼られている案内表には各階にあるシヨップの名前が記されていた。誰の目にもわかる、従業員用の裏口階段。ゆう子が見た螺旋状の階段はどこにもなく、ごくありふれた建物のバックヤードがそこにあった。

「あの、私が入った時はこんな感じじゃなかったんです。真っ暗で、階段もぐるぐる回るような作りで……」

ゆう子は慌てて説明する。

「大丈夫、わかっているわ。ゆう子ちゃんが入ったのは特殊な閉鎖世界、異空間だったのよ。今は正常な建物に戻っているわ」

ママは階上を見上げてから扉を閉め、オレンジ色のソウルジェムを取り出すと扉の前にかざしてみた。

「見て、かなり発光しているでしょ。これは魔女の結界があった証拠。この扉が結界の入り口になっていた証ね」

ソウルジエムはオレンジ色の光を強く揺らめかせていた。すでに魔女の結界は消え去っているが、その残り香というか、ついさつきまであった魔力の痕跡に反応していた。そしてマミのソウルジエムには黒いモヤが薄くゆらゆらと、さほど多くはないが、はっきりと見て取れるほどに混じっていた。

マミは再び扉を開けて外に出ると

「魔女の結界が消えているということは、佐倉さんはどこか別の場所に抜け出ているのかもしれないわ。待ってね、私のソウルジエムで佐倉さんの魔力の波動を探ってみるか」

と言つてソウルジエムを額に当て目を瞑った。ソウルジエムの探知機能を杏子の魔力の波長に合わせ、居場所や状況などを見ることができのだが、マミに見えたのは真つ暗で何も無い、ただ微かに血の匂いがするだけだった。

マミはソウルジエムを使つて杏子の目線を見ることができのだが、真つ暗で何も見えないのは杏子の目が開いていないからだと思つた。ひとり戦いに残つた杏子の目が閉じられているということは……

そしてこの微かな血の匂い。

目を瞑つたマミの瞼に、グツと力が入った。

「ごめんなさいね。私の魔力探知でも見つけられないわ、どうしちゃつたのかしら」

闇闇と血の匂いが意味するものが何なのか、ママはすぐに悟った。それでも動揺を抑え、努めて平静を保ちながらゆう子とキュウベえに

「状況が掴めない今、闇雲に探索を続けたいほうがいいわね。ここはひとまず、暁美さんの家に行きましよう」

集合場所の公園ではなく、ほむらの家に行こうと言い出した。実はママは今の状況がわからないのではなく、むしろかなり不味い状態だと感じていた。

杏子は恐らく、戦いに敗れた。

そして魔法の結界は消えている。

ソウルジェムを使って結界の行方を辿ることはできるが、ゆう子とふたりでワルプルギスの夜に匹敵する敵を相手するのは危険過ぎる。ここはほむらを交えて善後策を練るのが賢明だと判断した。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニもに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

15話）

「待つてください、杏子ちゃんを助けにいかないんですか？」

すぐにゆう子が意外そうな顔で聞いてきた。

「杏子ちゃんは、まだひとりで戦っているかもしれないですよ。それを置いて、行っちゃうんですか？」

強敵を相手にひとり残った杏子を置いていくわけにはいかない。自分を逃がすためにひとり残った杏子の身を何よりも案じているのはゆう子だ。ママにもその気持ちは痛いほどわかるが、軽率な判断はヘタをすればゆう子を巻き込み全滅の恐れもある。

「今は曉美さんと合流するのが賢明よ。ゆう子ちゃんが遭遇した敵は、私たちふたりで勝てる相手ではないわ」

「それは……どういう意味ですか？」

ママは自分の言葉にハツとした。

「巴さん、私たちふたりでって、杏子ちゃんは無事なんですよね？」

冷静に思案していたつもりが、ママの口から思わず不用意な言葉が漏れてしまった。

「ゆう子ちゃん、落ち着いて聞いてね。佐倉さんは多分、勝てなかった。私の魔力探知で捉えることができたのは暗闇と血の匂い。もう決着は着いていて、佐倉さんはきつと結界内で……」

「そんな！」

ゆう子の目に涙が浮かんだ。

「そんな……」

もう一度、力なく声を振り絞ったゆう子にマミは

「でも、もしかしたらまだ生きているかもしれない。その可能性はあるわ」

諦めてはいけない、と言った。

「私の魔力探知はね、佐倉さんのソウルジェムの波動を感知するの。そこから魔力の波長を合わせて佐倉さんに同調するんだけど、真つ暗で何も見えない中に血の匂いが漂っていたわ。真つ暗なのはきつと佐倉さんが目を開いていないから。血の匂いは出血が酷いんだと思うの。でも、ソウルジェムの波動を感知できているということ、佐倉さんのソウルジェムはまだ魔力を持っているということ。だから佐倉さんはまだ生きている、かもしれない」

かもしれない、と言ったのは

「私たち魔法少女は肉体の損傷は魔力で修復できるの。でも私に見えた佐倉さんは血煙

を纏って瀕死の状態。ということは、もう魔力で肉体修復することができないほどにソウルジェムが限界に達しているということ」

つまり

「今はまだ生きているかもしれないけど、瀕死の身体を限界に達しているソウルジェムの魔力でギリギリ支えているとしたら……いずれ穢れが溢れたグリーンフィードが円環の理を呼ぶことになるわ」

杏子は死の淵に立たされているということだった。

「だったら尚更、早く助けに行かなきゃダメですよ！」

「いいえ、違うの。だから尚更、曉美さんと一緒に行かなきゃいけないのよ」

ママは努めて冷静に、無理は避け、確実に杏子を助ける術を説明した。

「佐倉さんを助けるには曉美さんの力が必要なの。いい？ 佐倉さんが勝てない相手に私が挑んでも勝てる望みはないわ。ゆう子ちゃんとふたり掛かりでも結果は同じことでも、曉美さんと私なら、相手を足止めするくらいならできるかもしれない。その隙にあなたが佐倉さんを連れて逃げることでできれば、助かる望みはあるわ」

これが杏子を救うための最善の策だと考えた。

「大丈夫。佐倉さんは強い魔法少女よ、簡単に死んでしまうはずがないわ」

最後のママの言葉は柔らかく包み込むようだった。瀕死に陥る杏子を想い絶望に伏

しそうになるゆう子に、希望という名の温もりを与える優しい笑顔があった。

ほむらは単独行動が多く、携帯電話も持ち歩かない。ママの魔力探知も本人が遮断している。居所が掴めないが、ほむらが家に戻っている可能性もあるのですぐにシヨツピングモールを後にし、ほむらの家に向かった。

陽はまだ高く、雲ひとつない青空が平穏な週末を見せているが、ママの心は穏やかではなかった。どうも不可解なことが多すぎる。杏子ほどの魔法少女が勝てない相手がいるものなのか。しかもそれは魔女ではないはずだし、昨日の魔獣のような強大な敵ならばママのソウルジェムが反応しないのもおかしい。そしてこれはゆう子にも言っていないが、杏子は負けたのにどうして生きているのか。魔女の結界内で相手に打ち破られてしまえば死が必然。瀕死の状態とはいえ、ソウルジェムに魔力を宿した状態でまだ生きているのはなぜなのか。

急ぎほむらの家に向かいながら、ママは思案に暮れた。過去のように、使い魔がいて魔女が現れて……というシンプルな展開とは異なり、強大な魔力を秘めた相手の正体が見えてこない。今のところ魔女とも魔獣とも思えないし、街の人たちが変わりがないということは呪いや絶望を振り撒く存在でもなさそうだった。杏子を打ち負かしたのは一体何者なのか。

ママたちはシヨツピングモールを抜けて、大通りを北に走る。後ろにはキュウベえが小さな四肢を小刻みに繰り出しながら付いてきた。ここからほむらの家まではそう遠くないが、杏子の身を考えるとどれだけ急いでも足りないくらいだった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mnpow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部

16話）

ここで少し時間を遡る。

シヨッピングモールでの出来事の数時間前、暁美ほむらは朝早くひとりで家を出た。前夜にマミからの

「明日は暁美さんも一緒に探しましょう？」

という誘いを頑なに断り、行き先も告げず連絡手段も持たないまま独自の探索を開始していた。

魔女にもならず、消滅もせず、円環の理さえも覆してみせる……。

グリーフシードを探す目的をそう語ったほむらの考えは、マミたちとはだいぶ違っていた。マミのように「魔法少女としての使命をまっとうし、自己の命よりも優先すべき行動を取る」というヒロイズムではなく、杏子のように「無いなら仕方ない」というリアリズムでもない。言うなれば、誰にも頼らずに自らの意思や理念に則り理想を追い求める、排他的で独裁的な考え方が根本にあるといってもいい。そして円環の理以降は、

この排他主義と独裁主義が一層強くなっていた。

ほむらはグリーンフシードを求める理由を誰にも話していないし、また話すつもりもなかった。

残るひとつのグリーンフシードがどこにあるか……実はほむらも知らないのだが、探す当てはあった。マミはグリーンフシードが人の手にあるか、もしくは魔女の結界内で孵化を抑えて潜んでいると考えているようだが、そうではないと確信していた。そもそも穢れが溢れる寸前のグリーンフシードが人の手になれば、持ち主の負の感情を吸い上げ、すでに穢れが解放されているに違いない。また結界に潜んでいたとしても同じことで、それはもうグリーンフシードなのだから円環の理による導きで消滅しているはずだ。

つまり今、この見滝原にあるのはグリーンフシードではなく、穢れに満ちたソウルジェムだとわかっていた。

もともと見滝原にはほむらとマミと、隣街の風見野市から編入してきた杏子の3人しか魔法少女は存在しない。円環の理以降、グリーンフシードは魔女を産むことなく消滅するのだから、この街にはほむらたち3人以外のソウルジェムがあること自体がおかしいのだ。つまり、本来あるはずのないソウルジェムが見滝原にあるということは、どこか別の場所から持ち込まれた可能性が高い。……ということとは、持ち主がいる。

探すべきは、その持ち主。

そして持ち主は、魔法少女だ。

穢れたソウルジェムを持ち、見滝原にやってきた魔法少女がいるはず。そいつはどこから来たのか、何をしようとしているのか、果たして敵なのか味方なのかもわからないが、今はもうほとんど生き残っていないであろう魔法少女が向こうから出向いて来たということは何かしらの目的があるに違いない。ただ、ほむらたちが探知するそれは、すでに穢れが溢れているはずなのに円環の理に導かれることなくこの世界に存在している。

（魔法にもならず、消滅もせず、円環の理さえも覆している）

ほむらが求めるものが、そこにあった。

見滝原を南北に走る国道はこの街の重要な幹線道路で、週末でもたくさん車の往来がある。北は風見野市へ、南は隣の県に通じる道として、見滝原市のちょうど中心地に敷かれていた。ほむらはその道路沿いを南へ南へと歩く。特に目的地を決めずにただ歩きながら、ほむらは身体から微弱な魔力を発していた。薄く魔力を帯びた身体は、自らの魔力のカラーでもある紫色に発光していた。普通の人間には見えない光だが、同じ魔法少女から見ればすぐにそれとわかる、いわゆる目印のような魔力を発して歩いた。

マミがグリーンフィールドを探しているのは違い、ほむらはソウルジェムの持ち主を呼び寄せようとしているのだった。こうして魔力を発しながら歩いていけば、同じ魔法少

女ならず必ず見つけて接触してくるはず。相手が何か目的を持ってこの見滝原に来ているとすれば、それはほむらたち以外に考えられないからだ。

こちらから探すとなると相手の動き次第になってしまいが、相手に見つけてもらおうとする発想はマミや杏子にはないものだった。

晴天から差す陽が徐々に南の空へと昇り、ほむらの顔を明るく照らした。魔力で発光する身体に陽の光が相まって、紫色の光が一層鮮やかに映えていた。ほむらは時折足を止めて周囲を見渡したり、道路の反対側を歩く人を見たりと、自分の魔力に気付いていそうな者を探す。そうして1時間ほど歩いただろうか。それまで誰もほむらに気を止める者がいなかったが、オフィス街の横に差し掛かった時、刺すような視線を感じて立ち止まった。

「来た」

どこから向けられている視線か把握できないが、明らかに誰かに見られている。ほむらを魔法少女と認識している。歩道の先、後ろ、道路沿いの建物……ゆつくりと辺りを見回し視線の元を探すが、どこにも人影は見当たらなかった。人影も無ければ、車も通りかからない。ここは市内でも有数の幹線道路。

「ふふふ、っつちだよ」

幼い少女の声があった。ほむらはハッと振り向くと、道路の反対側の歩道から小さな少

女がこちらを見ていた。ガードレールの隙間から覗く小さな顔と身体。道路には誰ひとり、車1台と通りかからない。やがて道路や周りの建物がゆらゆらと一齐に色を失い、白と黒の2色だけになってしまった。モノクロームな景色はやがて規則的な色分けになり、碁盤目状の格子の目を色違いに並べた市松模様へと変化した。

「……結果ね」

ほむらはすでに異空間に取り込まれていた。恐らくこれは、現実世界の一部を切り抜いた結果。ほむらは異空間に入り込んだが、現実世界は同じ場所に存在しているのだから。

「やっぱりこの街にいた。お姉ちゃんの言ってたとおりだね」

少女はてくてくと道路を渡り、ほむらに近づいてきた。異空間である結果を広げたこの少女は、使い魔でも魔女でも、まして魔獣でもない。ほむらはこちらに歩いて来る、5歳か6歳くらいの幼い少女に向き尋ねた。

「あなた、魔法少女かしら？」

「そうだよ。わたしも魔法少女」

わたしも、と言った。少女はほむらの目の前まで来ると足を揃えて立ち止まり、名前を名乗った。

「わたし くるみ。つぶら くるみ」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

h t t p s : / / a n i m o n i . m a n b o u . c o m /

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部

17話）

白と黒の市松模様で構成された閉鎖空間で、小さな少女くるみを見下ろすほむらと、上目でほむらを見上げるくるみ。紫色の魔力を纏ったほむらは冷静に、淡々と話しかけた。

「ずいぶん可愛いらしい魔法少女さんだけど、その見かけはまやかしね」

見た目は幼い少女だが、くるみの発する魔力の波動は普通の魔法少女のそれとは桁違いだった。可愛い姿と裏腹に、底知れぬ邪悪な魔力を秘めているように感じた。そしてこのモノクロな閉鎖空間は、魔女の結界特有の異次元世界。杏子の魔法結界のように魔力の網を張り巡らせているのとは違い、これは魔女の結界そのものだった。

「ふふふ、見た目なんて魔法でどうにでもなるんだから」

そう言ってくるみはゆらめく水面のように身体をなびかせると、次々と見たこともない魔法少女に姿を変えた。

濃いグレーを基調としたロングヘアの魔法少女、唐紅色を基調としたツイントールの魔法少女、緋色を基調としたミディアムヘアの魔法少女。どの少女も見たことがない

が、「第二次性徴期」と呼ばれる十代前半の魔法少女の姿だった。これは魔力で身体構造を変化させる高度な変身魔法。ほむらたちも魔力による肉体の修復は可能だが、身体構造そのものを変化させるほどの魔法は使えない。

「紫色のお姉さんにも成れるけど、お姉さんはまだ生きてるからやめておくれ」

と、緋色の魔法少女の姿で、当人と思われる少し大人びた声で言うのと、くるみは元の幼い少女に戻った。紫色のお姉さんとは、ほむらを指している。

「なるほど、あなたのできたことが何となくわかったわ。あなたは、この街の魔法少女を殺しに来たのね」

「ふふふ。殺しに来たって言い方はちよつと酷いけど、似たようなものだからいいや」

くるみが見せた変身魔法は、過去に殺めた少女たちの姿なのだろう。

「それにお姉さん、それがわかっててくるみを呼んだんだよね。わざわざ魔力の光を見えるようにしてさ」

魔力の光を纏い、ソウルジェムの持ち主を呼び寄せようとするほむらの狙いは当たった。そして見滝原にやって来た理由も、この街にいる魔法少女が目当てだった。この街の魔法少女を殺すためにやってきていた。が、ほむらは別に驚くこともなく左手で長い髪を軽く撫で揺らしてから

「もう一度訊いておこうかしら。あなたは本当に魔法少女なのよね」

さつきと同じ質問を繰り返した。

「そう、くるみはキュウベえと契約した魔法少女。お姉さんと同じだよ」

「私と同じ?」

「お姉さんも魔法少女なんですよ?」

「ええ、そうね。でもあなたと同じではなさそうよ。私はソウルジェムの穢れでいずれ滅びゆく存在だけど、あなたはそうではないわね」

「お姉さんすごいね。くるみのこと何でもわかっちゃうんだ」

くるみは「ふふふ」っと不気味に笑った。

「魔法少女って不便だよな。いちいちソウルジェムの穢れを気にしていなきやいけないもん。それで穢れが溢れたら死んじゃうんでしょ? それじゃ何のために生きてるかわからないよね。でもくるみは違うの。だつてくるみのジェムは、どんなに穢れが溜まっても溢れることがないんだから」

小さな掌に、くるみの真つ黒なソウルジェムが現れた。それは黒く、どこまでも黒く、まるでこの世の黒という色を一点に集約させたような漆黒で純黒な魂の宝珠。向き合うほむらを黒い光が照らし、影になる部分が白くなっている。強すぎる闇の閃光が周囲の市松模様作用し、白は黒く、黒は白くと、色配置までも逆転させた。ソウルジェムから溢れる光は、濃縮された穢れが放つ放射光だった。このジェムは、途方もない量の

穢れを溜め込んでいる。

やがて放射状に広がる光が渦を巻くようにねじ曲がり、くるみを包んだ。黒い光の帯がくるみの身体を二重螺旋状に取り巻くと、幼い少女は真つ黒な影へと姿を変えた。影といつても立体的な、少女の身体がそのまま黒く染まってしまったような恰好。真つ黒な姿の中には淡い小さな光がいくつも、チラチラと光っていた。両手を横に広げクルリと横回転をした黒い影から、ほむらにテレパシーが伝わってきた。

『お姉さんのソウルジエムに溜まる穢れも、くるみが食べてあげる』

ほむらは素早く後ろに飛び退き、紫色に輝くソウルジエムを掲げると、足元から頭に向かつて白と紫の光を煌めかせ魔法少女に変身した。左手の甲にはうつつすらと穢れが揺れる、ダイヤ型のソウルジエムが収まっている。ほむらはそのまま高く飛び上がり、上空からくるみを見下ろした。

「穢れを食べるですって？」

『くるみは穢れを食べて生きてるんだよ』

黒い影は宙に浮いた状態から一気に加速してほむらに迫った。目も鼻もないのつぺらぼうな顔は口だけを大きく開き、ほむらのソウルジエムが収まる左手の甲に噛り付こうとしてきた。ほむらは間一髪で身体を捻り左手を引いたが、その突進までは避けきれずにそのまま体当たりを喰らってさらに上空へと跳ね飛ばされた。結界内の空は無限

に続いておらず、内膜のような結界の壁に激突し落下した。

ほむらを跳ね飛ばしたくるみの黒い影は空中でクルリと横回転すると、広げた両手を長く伸ばしてほむらに掴みかかってきた。

黒い腕が、伸びる。

身体的構造を魔力で捻じ曲げている。腕の先の両手はほむらの身体の倍以上はありそうな程に大きい。ほむらが空中に逃れると、ドドーンという音と共に黒い両手が道脇にある市松模様の建物を破壊した。白と黒の破片が飛び散り、砕けた建物の隙間からは薄つすらと白い光が漏れていた。ほむらは空中で一度制止すると、黒い腕が建物から引き抜かれる前に漆黒の弓を手に取り、淡いピンク色に発光する矢を番えた。六千石町でのあの時、一撃で魔獣を仕留めた光の矢だった。キリキリと引き絞り、黒い影本体に向けて狙いを定めたが、何を躊躇ったか弓を番える腕の力を抜いた。

『ふふふ、どうしたの？ それ、撃ってこないの？』

くるみの黒い影は伸ばした腕を建物に突き刺したまま動かない。ほむらは弓矢をその手から消すと

「そうね、この最後の一矢はあなたに撃つことはできないわ」

と言って砕けた建物の隙間から漏れる白い光を見た。あれはこの閉鎖空間と現実世界を結ぶ結界の裂け目だ……と思った時には建物を砕いた黒い両手はもうそこにはな

く、眼下にいたはずの黒い影も視界から消えていた。ハツと見上げるとほむらよりもさらに上から腕が振り下ろされ、今度は避ける間もなく巨大な両手に弾かれて地面に叩きつけられた。白黒の路面は激しく砕け、砂煙が上がる中に額から血を流すほむらがいた。

身体がバラバラになりそうなくらいの強い衝撃を受け、固い地面に叩きつけられ、ほむらは軽い脳震とうを起こした。めまいと激痛ですぐには起き上がれない。

そこへさらに黒い腕が一直線に突き出される。伸びた両腕はほむらの両足を掴み、そのまま空中に向かって引き寄せてきた。のっぺらぼうだった顔は大きな口を開けて待ち構え、ほむらの身体ごとソウルジェムに喰らいつこうとした。

両足を掴まれたほむらは逃れようがない。咄嗟に隠し持っていた手榴弾のピンを抜き、自分と黒い影の間で爆破させると、火薬の破裂と爆風でほむらと黒い影は引き剥がされるように吹き飛ばされた。掴まれていた両足は解かれたが、殺傷能力の高い破片手榴弾の破裂でほむらもひどい裂傷と火傷を負ってしまった。ほむらの身体を覆う薄い魔力の膜で爆発の威力は軽減されているが、普通の人間なら粉々になってしまうほどの威力を持つ「MK2破片手榴弾」の使用は仕方なかった。あのままでは間違いなく、身体ごとソウルジェムを喰われていただろう。

市松模様の地面に落下したほむらはよろめきながら、もうひとつ手榴弾のピンを抜い

た。それは黒い影に対する攻撃ではなく、結界の裂け目を広げるためだった。今のほむらには時間操作の魔法もなく、魔獣を仕留めた光の矢も使えない。魔力で自らの傷を癒すのが精一杯だった。

ここは、逃げる。

再び手榴弾の激しい爆裂と共に、結界の壁と思われる場所に穴が開いた。ほむらは懐から最後のひとつ、【M84 閃光手榴弾】を黒い影に向けて投げつけた。これは爆撃というよりも爆発音と閃光による目くらましのフラッシュバンで、ほむらはその爆発の際に結界に開けた穴から抜け出した。

くるみは強い。

ほむらの読みは浅かった。魔力の差が桁違いで、ほんの少し戦っただけで絶対に勝てないと思い知ってしまった。しかも相手は本気でほむらを殺しにきている。穢れを食べると言っていたが、それはつまりほむらのソウルジェムを喰うということなのだろう。恐らくそれが、くるみの魔法少女としての能力。言うなれば、ソウル・イーター（魂を喰らう者）

過去どれだけの魔法少女がくるみの餌食となり、ソウルジェムを喰われてきたのか。結界を抜け出たほむらは肉体修復を最小限に抑え、ボロボロの身体を引きずって逃げ延びた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mnpw.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部

18話）

魔法少女が、魔法少女を殺す。

魔法少女が存在していた頃を仮に魔女歴（まじよれき）と呼ぶとすれば、魔女歴では魔法少女が魔女を殺していた。そして円環の理以降の今の世を円環の歴（えんかんのこよみ）と呼ぶとすれば、円環の歴では魔法少女が魔法少女を殺す。

魔女と魔法少女……。

姿は違えど、それはどちらも人間の少女の成れの果て。人が人を殺し、血で血を洗う人間の歴史のごとく、魔法少女もまた、殺し殺される運命なのか。

「……が、ほむらさんの家ですか」

マミたちがほむらの家に到着すると、家の入口のドアが開け放たれたままになっていた。それも隙間程度ではなく、完全に開けきつている状態。不用心にもほどがある……と思う間もなく、微かに血の匂いが漂ってきた。よく見ると、ドアノブ、壁、床など、白を基調としたほむらの家中は至る所にこすれたような血の跡が残っていた。

「曉美さん!？」

マミは慌てて中に入りメインフロアになる真っ白な円形の部屋に來ると、そこにはボロボロになったほむらが倒れていた。魔法少女の姿のまま、服は所々が破れ、焼け焦げ、血の跡で黒く染まり、満身創痍の状態で氣を失っている。額から流れ出た血は生々しい赤黒さを留めていて、傷が完全に癒えていないのが見て取れた。

「これは……」

「もしかして、死んじやつてるんですか?」

「いいえ、でも相当な重傷。どうしてこんな……」

普段から用心深いほむらがマミたちの來訪にも氣付かず、意識がないままだった。ただ静かに息をする音だけが聞き取れた。

「魔力での肉体修復が追いついていないのかしら。それにしても曉美さんがここまで酷い傷を負ってくるなんて」

マミは急いで自らの魔力を開放し、ほむらの身体を癒す肉体修復に当たった。額の傷も火傷の後もみるみる回復していく。ふと、ほむらの左手の甲にあるソウルジェムを見ると、少しだけ穢れのモヤが揺れているのが見えた。

「巴さん、私もお手伝いできますか?」

ゆう子が横から心配そうに見てきた。

「大丈夫、私はみんなの中では一番こういうのが得意なのよ。ほら、もう傷はほとんど治っているわ」

ママは「ふうっ」と軽く息を吐いて、ほむらに魔力を向けていた両手を下ろすと

「まだ意識は戻らないけど命に別状はないようだし、すぐに目を覚ますはずよ」

と言つてそばにあるソファに腰掛けた。ほむらの傷は癒えたが、魔法少女の服装はボロボロのまま。袖やスカートには焼け跡が残り、胸や腰のリボンも千切れ、服のあちこちには引き裂かれたような跡から傷の癒えた白い肌が見えていた。

これは、戦いの跡だ。

ほむらはどこかで何者かと戦つてきている。そして恐らく、戦いに敗れ命からがら逃げてきたのだろう。ほむらのような歴戦の魔法少女をここまで打ちのめす敵がいる。杏子が殺されかけ、ほむらも重傷を負うほどの相手とは一体……。

「これじゃ、3人で佐倉さんを助けに行くのは無理ね」

ママの考えた杏子を救出する計画は崩れた。一刻を争う状況の中で、もう選択肢はひとつしか残されていないとママは思った。

「ゆう子ちゃん、シヨップینگモールでの時のことをもう一度教えてもらえないかしら」
「は、はい。えっと……私がひとりだけでブリキの兵隊人形に囲まれちゃった時に杏子ちゃんが助けに来てくれて……」

「ううん、その前。あの魔女の結界はゆう子ちゃんかひとりで見つけたのよね？ その時、ソウルジエムに反応はあったのかしら」

「ママには、未だに杏子が捕らえられている結界の場所が掴めない。ソウルジエムを使った探知機能でも居所がわからないので、ゆう子が魔女の結界を見つけた経緯が知りたかった。」

「いいえ、私はソウルジエムの使い方がまだわからないので、あの時は確か……シヨツピングモールの中で小さな女の子を見つけました。その子がひとりであの扉を開けて中に入って行ったから、どうしたのかなって追いかけたらあの部屋に」

「小さな女の子？」

「5歳か6歳くらい髪の毛をふたつに結んでる子なんですけど、あんな所にひとりでいたから迷子かと思って」

「それを聞いてママの頭の中に一瞬、つぶらくるみが思い浮かんだ。くるみも、髪の毛をふたつに結んだ5〜6歳の少女だった。」

「もしかしてその子、くるみちゃんという名前じゃないわよね？」

「直接お話する前に見失っちゃったんで名前は聞いてませんが、巴さんの知ってる子なんですか？」

「いえ、ごめんなさい。そんなはずはないわね」

同じくらしいの時間に自分が家まで送り届けようとしていたので別人だろう。シヨツピングモールからの距離を考えれば同一人物とは考えにくい。週末の歓楽街ならば似たような境遇の子供がいてもおかしくはない、と思ったのだが

「くるみ……つぶら、くるみ」

ほむらがゆつくりと呟いた。肘で上半身を支えながら身体を起こし発したその声に反応したのは、マミとキュウベえだった。

「暁美さん、くるみちゃんを知っているの？」

「知っているも何も、今あなたが言った名前の子に、私は殺されかけたのよ」

「何ですって!?!」

ほむらは左手にある自らのソウルジエムをチラッと見てから、ヨロヨロと立ち上がった。

「つぶらくるみ、あなたの言った少女と同一人物なら、あの子は最強最悪の魔法少女よ」

「くるみちゃんが、……魔法少女？」

小さな身体で幼い笑顔を浮かべていたあの少女が、魔法少女……。信じ難いという表情を浮かべたマミは、くるみとの出会いを思い出してみた。

あんな小さな子供がオフィス街のど真ん中にたったひとりで居たこと

他の誰でもなくマミに近寄ってきたこと

ソウルジエムが見えていたこと

そして、この街に長年住んでいるマミですら見たことがなかった、あの市松模様の建物。

たしかに普通の少女ではないかもしれないが

「でもくるみちゃんは小さな子供。あんなに幼い魔法少女がいる……はずないわよね」
「いいえ、あの姿は見せかけ。つぶらくるみは魔法の力で自分の姿をいくらでも変えられるわ。現に私の目の前で、今まで殺してきた魔法少女の姿を何人も見せてくれたのよ。魔力で肉体構造そのものを変化させるなんて芸当は初めて見せてもらったわ。あの子は紛れもない魔法少女。インキュベーターによって生み出された魔法の契約者」

ほむらは部屋の中央にちよこんと座る魔法の使者、キュウベえを見た。それに釣られてマミとゆう子もキュウベえに視線を向ける。皆の視線を受けたキュウベえは表情を変えずに、ゆっくりと語りだした。

「つぶらくるみ、か。確かに彼女は僕が契約した魔法少女だ。いや正確には、彼女たちと呼ぶべきだけだね」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mnbow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

19話）

「マミたちが魔法少女になるずっと前。とある北の都市でキュウベえと契約を交わしたふたりの少女がいた。」

少女たちの名前は螺旋（つづら）くるみと、姉の螺旋あかね

双子の姉妹だった。ふたりは両親を亡くし絶望のあまり命を絶つ寸前でキュウベえと出会い、お互いの願いを告げていた。

姉のあかねの願いは「どんな悲しみも忘れられること」

そして妹のくるみの願いは「どんな悲しみにも耐えられること」

それぞれの願いは成就され、ソウルジェムが輝き、魔法少女となった。

ふたりは強かった。

魔法少女としての力もさることながら、願いによって生み出された異質な能力があったからだった。

あかねの願い「どんな悲しみも忘れられること」

それは魔法少女としての体質に影響し、彼女のソウルジェムはどんなに魔力を使って

も穢れが蓄積されることがなかった。

そして妹のくるみの「どんな悲しみにも耐えられること」という願いも、いくら穢れを蓄積しても魔女化せず、永久的に穢れを溜め続けることができるソウルジェムを生み出した。

ふたりの願いは己の欲望を満たすためでなく、誰かを救うためでもない、ただ悲しみの行方を捻じ曲げるだけのものだった。

この願いによつて生み出されたふたりは、魔法少女の決定的な弱点、穢れの蓄積によつて魔女化するというルールを覆すイレギュラーな存在だった。常に全力で魔力を開放し、どんな強大な魔女も打ち破り、そして力を付けていった。

初めのうちは魔女と戦うことに何の疑問も抱かなかつたふたりだが、やがて魔女を退治する魔法少女の役目を放棄した。いや、正しくは魔女を狩る意味の無さに気付いてしまった。魔女が落とすグリーンフィードは、穢れの浄化以外に使い道がない。穢れの蓄積されないソウルジェムを持つあかねと、いくら穢れが蓄積されても溢れることのないソウルジェムを持つくるみにとつて、グリーンフィードは無用の長物だった。

ふたりはしばらくして、キュウベえの前から姿を消した。

「その後、彼女たちがどこでどうしていたのかは僕にはわからない。円環の理以降、魔女の産まれない世の中で魔女化することもなく、穢れの溢れないソウルジェムは円環の理

に導かれることもなく、今は魔法少女を殺す魔法少女になってしまったようだね」

キュウベエの回想を黙って聴いていたほむらは思った。やはり魔法少女という存在は、正義の味方ではない。奇跡と魔法を司る者ではない。希望と祈りによってもたらされた魔の力は、絶望と破滅を招くだけだ。

「インキュベーター、あなたはとんでもない化け物を生み出してしまったようね。今の話を聴いていると、その姉妹は弱点の無い不死身の魔法少女ということになるわ。魔力に限界が無いということはいくらでも魔法の力を開放でき、穢れ知らずのソウルジェムは永遠の肉体修復を可能にする。おまけに魔女を狩ることに飽いた挙句、今度は魔法少女を狩る魔法少女になってしまった」

ほむらは見下すように、軽蔑の目を向けて言葉を吐き捨てた。

「僕はただ、僕たちの意思に則って魔法少女の契約をしているだけだからね。すべての事象、すべての因果で宇宙のエントロピーが増大するのは自明の理だ。だから、限りある宇宙エネルギーの継ぎ足しをすることが僕らの存在意義でもある。その過程で些細なイレギュラーは付きものだよ」

「些細ですって?」

「そうさ。あの姉妹にしたって、魔女に成らなかつたことは些細なイレギュラーだ。いや、その前に彼女たちの願いがイレギュラーだったのかな。どんな望みも叶うというの

に、感情を封じ込めるだけの願いを言うなんて。人間は特にそうだね。君たちの持つ感情という現象は、極めて稀な精神疾患でしかない。それは僕たちの干渉の及ばない部分なんだよ。感情の影響が強すぎるせいで予想の範疇を超えたことが起こる。まったく、人間というのは不思議な生命体だね」

「その感情が、人間の欠点であり美点でもあるのよ。あなたに言っても無駄でしょうけど」

「僕は君たちのことを否定するつもりはないよ。その感情があるお陰で僕たちは莫大なエネルギーを回収できたわけだからね。それよりも、あの姉妹を相手に杏子を助けようなんて自殺行為も良いところだ。君たちが束になったところで、とても敵う相手じゃない。今のあのふたりは魔法少女でも、魔女でもない。無限の力を宿した魔力の塊といってもいい。君の知っている力と比べるなら、そう……あのワルプルギスの夜以上だね」

限界のない魔力の成長で、最強最悪の魔女を超える力を身に付けている。そんな相手がふたりもいること自体、戦慄すべき状況だった。

「待って。杏子を助けるとはどういうこと？」

ほむらは杏子の件を知らない。今ここに杏子だけがないこと、なぜゆう子たちがここに来ているのかを尋ねた。

「あ、あの……多分その螺旋状っていう人のところに杏子ちゃんが閉じ込められちゃって、

まだ生きてるはずだからほむらさんと一緒に助けに行こうって、巴さんが……」

ゆう子は簡潔に状況を説明しながらマミの方を見ると

「巴さん？」

いつの間にか部屋の中からマミの姿は消えていた。さつきまでゆう子の横でソファに座っていたはずだが、ゆう子もほむらも気付かぬうちにどこかへ行ってしまったようだった。

「そういえば巴さんも、螺良くるみって子を知ってるみたいでしたけど」

「今の私とキュウベエの話で何か思いついたってことかしら。まさか、ワルプルギスの夜を超える魔法少女にひとりで立ち向かう気？」

「巴さんは、私とふたりじゃ無理だけど、ほむらさんと3人なら何とかなるんじゃないかって……」

（私たち3人で何とかなるですって？ 冗談じゃないわ、私たちが100人で束になってもどうにかなる相手じゃない）

ほんのわずかな時間だが、螺良くるみを相手にしたほむらはその力量を見てきた。あの時は逃げ延びるだけが精一杯だった。しかもくるみは遊び程度の力しか出していなかっただろう。生きてあの結界を脱出できたことは奇跡に近いといってもいい。

ほむらの身体はマミの魔力修復によって外傷は癒えているが、体中の骨が折れていて

満足に動ける状態ではなかった。マミもしばらくグリーンフィードで穢れを浄化していないから、魔力に余力を残すためにほむらの肉体修復は最低限に留めたのだろう。そしてほむらの状態を見て戦力から除外し、まだ魔力の低いゆう子を置いてひとりで行ってしまったのだと思った。

杏子が捕らえられているとわかっていて放っておくマミではない。そんなマミの考えが手に取るようにわかったほむらは、部屋の出口に目をやり

「ひとりで行くなんて、あなたの方がよっぽど背負い込んでいるわ」と、小さく呟いた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニもに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

20話）

杏子を瀕死に陥れ、ほむらにまで重傷を負わせるほどの力を持つ魔法少女。いや、もはや魔法少女と呼ぶべきかどうかともわからない魔法の契約者、螺良（つぶら）姉妹。彼女らがなぜ魔法少女を殺す存在になってしまったのか、マミには少しだけわかる気がした。

（きつと、生きることには絶望している）

特別な力を手に入れ、他人と違う能力を持ったところで、悲しみを忘れることはできない。どんなに力を付け絶対的な存在となったところで、悲しみを打ち消すことはできない。過去の幸せ、家族との安寧、思い描いた未来、そのすべてを失って魔法少女に転身したものの、待ち受けていたのは魔女との戦うだけの過酷な運命。そんな日々は心を疲弊させ精神を侵していったのだろう。

絶望から希望への相転移によって生まれる強い感情エネルギーは、再び絶望へと墮ちる際にはそれ以上のエネルギーを持つ。人間の中でも、とりわけ「第二次性徴期」と呼ばれる思春期の少女が持つこの熱量は莫大な量に達する。

螺旋姉妹の願った魔法少女への祈りは、悲しみの行方を捻じ曲げる負の感情。救われぬ感情は強い因果となり、ふたりの魔力の源となり、やがて膨大な量の穢れを発生させた。しかし穢れの蓄積されないあかねと、穢れが溢れなくくるみのソウルジエムは、魔法と成り果てることもなく、円環の理に導かれることもなく、永遠に穢れの呪縛から解かれることがない。

穢れは魂をむしばみ

理性や慈しみを失い

愛情や友情を失い

人の心を失っていく

ソウルジエムがグリーンフシードへと変わらなくても、ふたりの魂は果てしない絶望に浸されている。姿は魔法少女のままでも、ふたりの魂はすでに魔女そのもの。今はすべてを滅ぼし、自らも破滅を迎えるためだけに生きようとしているのかもしれない。

そして彼女たちはなぜ魔法少女を殺しているのかも、よくわかっていないのだろう。今はすべてが憎い。暴走する感情の矛先は、限りある命に向けられている。決して滅びることのない魔法少女が求めたのは、滅びという理想。

生きることを望む生命はやがて死へと向かう。その理もまた生きるものの運命。人も魔法も、そして魔法少女も。

「矛盾しているわよね」

ママはくるみを送って行った市松模様の家の前にいた。ほむらとキュウベエの話を聞き、杏子の居場所を確信した。ただひとりでここへ来たのは、ママなりの考えがあったからだった。

ひとつは、重傷を負ったほむらを見てママは気付いたことがあった。ほむらのソウルジェムには薄つすらと穢れが漂っていたが、まだ魔力に余力があるように見えた。なのに、なぜほむらは魔力で肉体修復をしなかったのか。おそらくほむらには何か考えがあるのだろう。魔力の消費を抑え、機を伺っているのかもしれない。だからあれだけの重傷にも関わらず魔力を使わずにいた。命を留めるギリギリのラインで魔力を封印し、温存している。ならばこの後は任せるべきだと思い、ほむらを置いて来た。

そして、ゆう子も連れてこなかった。

（ゆう子ちゃんも、暁美さんの家で待っててちょうだいね。もう、これ以上の犠牲は出したくないから）

自分とほむらで足止めをし、ゆう子に杏子を連れて逃げてもらう算段だったが、ほむら無しではゆう子にまで危害が及ぶ可能性が高い。危害が及ぶどころか、魔力の低いゆう子が1番殺される可能性が高い。

ママには気負いもあった。それは、杏子たちを巻き込んだ責任を感じているからだっ

た。しかし決して死に急いでいるわけではない。命を懸けて杏子を助ける覚悟はあるが、ここで死ぬつもりはなかった。杏子を連れて逃げる。ほむらに何か策があるのなら、今は螺旋姉妹の相手をするよりも、後輩であり、弟子であり、妹のような存在の杏子を何としても救い出す。その為に多少の自己犠牲は厭わない。

「みんな、黙って出てきちやっつてごめんなさいね。でも佐倉さんは私が必ず取り戻すから」

市松模様の家はひっそりと建っている。辺りを通りかかる人はなく、柔らかな午後の風が足元の草花を揺らしていた。晴れ渡った青空と緑の草花に映える白と黒の市松模様。

ママは黙ってその扉を開いた。

中は薄暗くてよく見えない。扉を大きく開け放つと、差し込む陽の光が建物の中を照らしていき、その明るさに反応するように部屋の中の白黒模様がはつきりと見えるようになった。白は白く明るく、黒は黒く暗く、明暗と濃淡をくつきりと映し出す市松模様はあまりに鮮やかで美しく、そして妖しい文様だった。

目の前に広がるのは大きな螺旋階段。階段も、部屋の床も壁も、すべてが白黒模様で広がっている。ママは部屋の中へゆつくりと足を入れた。人の気配はない。

(誰もいないのかしら)

くるみと別れてからしばらく時間が経っているから、どこかに出掛けてしまったのか。他の魔法少女を探しに、見滝原の市内を彷徨っているのか。マミが部屋の中へ数歩、歩みを入ると後ろの扉が

ガタン

と大きな音をたてて閉じられた。チラつと振り返るが、誰もいない。扉の上には「入口」と書かれた非常灯が灯っているだけだった。マミは正面の螺旋階段に目をやった。ゆう子が言っていたのはこの階段だろう。建物の中には他に部屋らしきものは見当たらない。支柱のない奇妙な螺旋階段が上へ上へと伸びていて、行きつく先は闇の中に消えている。

杏子の姿はどこにもなかった。

マミは静かに階段を上って行った。くるみたちがいないのは都合がいい。余計な戦いは避け、杏子を見つけ連れ帰る。大きな螺旋階段をぐるぐると上っていくと、やがてマミの足にヌルつとした感触があった。白と黒の市松模様を乱す赤黒い滴りは、血の跡だった。すぐに見上げると、それは階段の上から垂れていたのだと気付いた。頭上から突き抜けた刃の穂先から、ポタつと一滴の血がマミの頬に垂れ落ちた。あの刃は、大きな穂が特徴的な杏子の槍だ。

「佐倉さん！」

慌てて階段を駆け上がったママの目に飛び込んできたのは、胸に槍の突き刺さったままの無残な杏子の姿だった。左腕を失い、ミントグリーンのパーカーを黒く染め、突き刺さる槍の柄には杏子のと思わしき腕が掴んだままになっている。ママは思わず目を背け、両手で口を覆った。戦慄すべき光景だった。それでも力の限り瞼を開けその凄惨な姿を見ると、杏子の眼は閉じられたままで、顔は血の気が引いていて土黒い。命の灯火が消えているように、まるで死んでいるように、その細い身体は横たわっていた。

「酷い……」

トドメのひと刺しと思われる突き刺さった槍、噴き出した血の跡、何より残酷なのは、そのまま放置されている身体。罪悪感も慈悲の心も何も感じられない、殺すというよりもただ壊しただけのような有様。ママに込み上げてくる感情は、怒りと悲しみと恐怖だった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mnbow.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

21話）

魔法少女は魔力で傷を癒すことはできるが、死んだ者を生き返らせることはできない。今マミの目の前にある杏子の身体は、大きな槍で胸を突き刺され、大量の出血の跡を残し、命尽きているように見えた。

しかし、杏子は生きている。

マミは突き刺さった槍を掴む杏子の腕を見た。無残に千切れた左腕、その手の指には杏子のソウルジェムを留めた銀の指輪がはまっていた。

魔法少女の「死」とは、ソウルジェムの破壊か、魔力の限界を迎えて円環の理に導かれる時。そのどちらかが完全な死を与えるが、杏子の指にはソウルジェムがある。そしてこの世に身体を残しているということは、円環の理に導かれているわけでもない。杏子の魂は、今なお生き続けている。

（佐倉さん、あなたは流石だわ）

マミは杏子の魔法少女としてのセンスに驚いた。突き刺された槍は螺旋良姉妹にやられたのだろう。魔法少女姿の杏子は胸にソウルジェムを装着していたはず。そこをひ

と刺しで碎かれようとした瞬間、その刹那、杏子は自ら魔法少女を解いたのだ。槍はそのまま突き刺さったが、魂の宝珠であるソウルジエムは指輪に戻り、損壊を免れていた。(トドメの一撃を、そんな受け方ができるなんて)

マミはすぐに千切れた左腕を槍の柄から剥がしてしゃがみ込むと、元の左腕に繋ぎ当てるようにして魔力を向け肉体修復にかかった。杏子のソウルジエムは身体から離れたが、それはほんの数センチ。これなら肉体との結合が途切れることはない。

(最後に残った僅かな魔力で、ギリギリ命を保っていたのね)

魔法少女を殺すなら、ソウルジエムを碎けばいいことくらいは螺旋姉妹もわかっていたはずだ。杏子の胸をひと突きで完全に仕留めたと思っただろうが、まさか今わの際に自ら魔法少女の姿を解くとは考えもしなかった。いや、自分でさえもそんなことは考えつかないだろうとマミは思った。

マミは全力で癒しの魔法を充てた。治癒の力を注ぎながら刺さった槍を抜き、胸の致命傷をみるみる回復させた。杏子の顔には血色が戻り、微かな呼吸の動きが見られるようになった。まだ目を覚まさないのは、意識を深く眠らせて冬眠するように肉体の活動を最小限に抑えているせいだろう。

その時、螺旋階段の上の方から声がした。

「お姉さん、来てたんだ」

薄暗い階段の手すりに手を掛けて下りてきたのは螺旋良くるみだった。さつきまで誰もいないと思っていたのに、いつの間に現れたのか。マミはその気配さえ感じることができなかったことにゾツとした。

「大事な用事はもう済んだ？」

くるみがニコニコしながら訊いてきた。マミはすぐに癒しの魔法を止め立ち上がった。治療を済ませたらすぐに逃げるつもりだったが、杏子の意識が戻らないうえにくるみに見つかってしまった。いや、もしかしたら最初から見られていたのかもしれない。

「これは、あなたの仕業なの？」

マミは穏やかに、しかし緊張しながら言った。

「ふふふ、それはくるみじゃないよ。あかねお姉ちゃんがやったの。その人、佐倉さんだっけ。お姉さんのお友達なんだよね」

「ええ、そうよ。佐倉さんを返してもらえるかしら」

「いいけど、もう死んじやってるよ」

やはりこの姉妹は、杏子が死んだと思っている。マミは冷静に言葉を繋げた。

「だったらもう用はないでしょ。佐倉さんはあなたたちのおもちやではないのよ」

「じゃあ、お姉さんがくるみと遊んでくれるなら返してあげてもいいよ」

「そうね。そういう約束をしたけど、私もあなたのおもちやではないの」

まるで子供とのやりとりのようだが、くるみの言う遊ぶとは、命のやりとりなのだろう。くるみはオフィス街の公園で出会った時と同じ格好をしているが、あの時の幼さは感じられない。声は5、6歳の少女そのものだが、雰囲気はまるで別人だった。

「そういえば約束してたよね。どんな約束だった」

くるみは少し考えてから

「指きりげんまん 嘘ついたら はりせんぼん飲ます」

と、数時間前にママが別れ際に歌ったわらべ歌を口にし不気味な笑みを浮かべた。

「お姉さん、すごく強いでしょ。きつと紫色のお姉さんよりも、その佐倉さんよりも。ううん、もしかしたらくるみが今まで会ってきた魔法少女の中でも一番強いと思うよ。公園でソウルジエムを見せてもらった時にわかったの。穏やかな話し方してるけど、秘めてる魔力はわかるんだから」

「あら、お世辞はいらないわよ？ 私は戦いたくないの。あなたたちの遊びに付き合うつもりはないのよ」

「くるみがこんな姿だから勘違いしてるんだと思うけど、これでもお姉さんよりずっと年上なの。冗談で言っているわけじゃないんだよ」

「飲み込みが悪いのね。佐倉さんを返してくれれば見逃してあげるって言ってるのよ」

「へえ、やつぱり強いんだ。そんな強気なこと言ってくるなんて、よっぽど自信があるだ

ね」

くるみの口調が、徐々に大人びてきた。実際の年齢はわからないが、魔法の力で姿を幼い少女に変えているらしい。キュウベえも、螺旋姉妹が魔法少女になったのはマミよりもずっと前と言っていた。ということとは、年齢も魔法少女としての経験もマミの上をいくのだろう。そして遂に、その本性を現した。

くるみは「ふふふ」と笑ってから、真つ黒なソウルジェムを掲げ、黒き光を纏い、暗黒の魔法少女へと姿を変えた。

「その姿は……無限の穢れと絶望、そして悲しみに侵されているのね」

『違うよ。くるみはどんな穢れも絶望も、悲しみさえも糧として生きているの。永遠に穢れを溜め続け、絶望を飲み込み、悲しみを抱き続ける。くるみは魔女にもならないし、円環の理も覆す。そして、この世の黒き感情の頂点になるの』

「何を、言っているの?」

『わからない? すべての負の感情、恨み・嫉み・悲しみ・怨嗟・憎悪・呪い・絶望……その頂点は何だと思う?』

くるみのテレパシーがマミの頭の中に、心の中に強く響く。

『それはもう、悪魔と呼ぶしかないじゃない。黒き感情の頂点は、黒き悪魔なんだよ。円環の理が正の感情の頂点なら、くるみは負の感情の頂点としてこの世の理となる。その

為にはもつともつと、たくさん穢れが欲しいの。負の感情を凝縮したエネルギーが欲しいの。だから……お姉さんのソウルジェムに溜まる穢れも、くるみが食べてあげる』

のつべらぼうなくなるみの黒い影は薄笑いの口を大きく開け、顔からマミに向かって飛び込んできた。マミは素早く飛び上がり身体を捻って身を躲すと、橙色に輝くソウルジェムを掲げ魔法少女に変身した。そのまま階段に横たわる杏子の前に着地し、固有魔法である拘束リボンを出現させた。リボンを伸ばし杏子の身体にぐるりと繭のように巻き付けると、表面の蝶結びには赤い錠前が施された。するとリボンの繭は一気に収縮され、錠前の鍵穴の中に吸い込まれるようにして消えてしまった。カチリと鍵のかかる音が鳴り、杏子を封じ込めた錠前はマミの手の掌に乗った。

「佐倉さんは返してもらおうわよ」

魔法の錠前は光の粒となり、マミの右頭部にある髪留めのソウルジェムに吸収されていた。

「私のソウルジェムも、佐倉さんのソウルジェムも、あなたたちの糧ではないわ。魂の宝珠であるソウルジェムは、希望と祈りによって生まれた奇跡の結晶。その中に宿る負の感情も、正の感情も、私たちを育んだ大事な思い出。負の感情の頂点が悪魔だなんて、勘違いもいいところよ」

『へえ、不思議なことを言うんだね。お姉さんならわかってくれると思ったんだけど』

「正しさも間違いも、明も暗も、強きも弱きも、すべてが表裏一体となって生きているのが人間なのよ。私たちは魔法少女であり、人間でもある。正しさがあるから間違いに気付ける。明るさがあるから暗さを避けようとする。強さがあるから弱きを助ける。どちらかだけでは何も生まれえないわ。あなたも同じよ、くるみちゃん」

『じゃあ、どうしてくるみのソウルジェムは輝かないの？ 絶望と呪いで穢れに溢れ、黒き感情だけで成長し続けるの？ お姉さんの言っていることと矛盾してるよ』

「絶望と希望の差し引きはゼロ。絶望に溢れた分だけ希望を祈れば、ソウルジェムは再び輝くはずよ」

マミの言葉は強かった。くるみたちがどれだけ暗い道を歩んできたかわからないが、ふたりが魔法少女になる瞬間はソウルジェムが輝いたはずだ。絶望に堕ちた今は黒く澱んでしまったが、希望を祈れば再び輝きを取り戻すことができると思えた。

かつて、自分がそうであったように。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト【ア
ニもに！】にて公開中です。

h
t
t
p
s
:
/
/
a
n
i
m
o
n
i
.
マ
ン
ボ
ウ
.
c
o
m
/

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

2話）

『もう遅いんだよ』

くるみは両手に魔力を集中し、黒いギザギザな指先を長く伸ばした。ほむらの言っていた、魔力で肉体構造を変化させる魔法だ。

『わたしたちはもう何年も、こうして魔法少女を殺してきたの。殺して、殺して、殺して、ソウルジェムを喰らいつくしてきたの。わたしたちの魂にどれだけの因果があるかわかる？ 魔法少女が背負う因果を、何十人何百人と飲み込んできたくるみの身体が、どれだけ黒く染まっているか見える？』

黒よりも黒いくるみの身体。その中に煌めく無数の小さな光は、今まで殺してきた魔法少女の命の数なのか。

『くるみが向かう負の感情の頂点は、この階段と一緒。どこまでも続く螺旋の迷宮。一度上りだしたら、もう下は見えないんだよ』

くるみの指先がマミを襲う。長く伸びた指を鋭利な刃物のように突き刺してきた。それをマミは紙一重ですり抜けると両手にマスケット銃を構え、くるみの肩を狙い撃つ

た。銃弾はくるみの肩を貫通し、黒い液体がほとばしる。

『痛くないよ』

飛び散った黒い液体はくるみの血液か。大勢の魔法少女を殺し、そのソウルジェムを喰いつくしてきたくるみが背負う因果は、身体も心も、血液までも黒く染めている。

「螺旋の迷宮を後戻りできないんじゃないわ。あなたは戻りたくないと思っっている。魂は穢れに苛まれ、絶対的な力に魅入られ、絶望の道しか見えなくなっただけよ」

負の感情エネルギーが理性を凌駕してしまい、視野が狭くなっている。目の前の一点しか見えていない。踏み外した道を歩み続け、それが正しいと思いつみ、後戻りも回り道も拒絶している。

『戻れないんじゃない。戻らないんじゃない。お姉さんは間違ってる』

くるみは両手を挟んでマミを捕まえようとした。長く伸びた指が絡められマミを覆いつくすが、マスケット銃の連射でくるみの指が弾け飛んだ。マミはその隙間から飛び上がり階段の手すりに乗り上げると、階段の外側の空間に大量のリボンを張り巡らせ足場を作った。フワッと宙に浮き、張り巡らせたリボンの足場に着地すると

「くるみちゃん、ここちちに来てみなさい」

と言ってくるみを誘った。くるみは階段から素早く飛び出し、リボンの足場を伝ってマミの頭上に止まった。

「どう？ 狭い階段の中と、広い階段の外からでは、見える世界が違うでしょう？」

螺旋階段の頂上は暗くて見えないが、マミが入ってきた入り口にある非常灯の明かりで、「出口」と書かれた扉が見えている。

「あそこから、もう一度やり直すことだってできるのよ」

マミはくるみを救いたいと思った。

希望を祈り魔法少女へと転身した少女たちは、決して幸せではない。過酷な運命を背負い、魔女との戦いに身を置き、ソウルジェムを掲げ、やがて滅びゆく存在。願いを叶える奇跡の代償はあまりに大きく、待ち受けるのは絶望しかない。しかしソウルジェムが輝く限り、絶望から希望へと転移する正の感情エネルギーは幸せな夢を与えてくれる。マミには、そうして今がある。

魔法少女には、奇跡も魔法もある。

くるみは動かない。マミの言葉が届いているのか、リボンの足場で静かに螺旋階段を見ていた。ぐるぐると、いびつなうねりでそびえ立つ螺旋階段。くるみの傷口から、黒い穢れのようなモヤがもうもうと立ち上っていた。

黒いモヤがくるみの身体を包み込むと、再び殺気が込められた。弾け飛んだ指を瞬時に再生させると、両手を巨大化させ腕を伸ばしてマミに振り下ろしてきた。マミは一旦身体を屈め、リボンの反動でジャンプして頭上のリボンを掴みくると回転した。くる

みの腕はマミを追跡するように後を追い、背中を掻き切るように一閃してくる。マミは足場のリボンを伝い渡って攻撃を躲した。

「くるみちゃん！」

『くるみの穢れと絶望、悲しみは何者にも染められない無限の黒。その負の感情をすべて受け入れるのがくるみの願い。お姉さんの言っていることは間違ってるの。お姉さんと話していると気分が悪い』

くるみはリボンの足場を鋭い指先で掻き切って螺旋階段に飛び移り、小さな身体に魔力を込め手足を長く伸ばした。そびえる螺旋階段に片腕を回すと、しがみつくように抱え込み、さらに身体までも巨大化させた。溢れる魔力はどんな魔法も可能にしている。身体の伸縮、構造の変化、肉体修復、限界のない魔法の力は無限の黒を謳ったくるみの願いそのもの。

『この螺旋階段の行きつく先に、わたしたちの未来があるの。わたしたちが辿り着く場所なの。死して悪魔は世の理、もう後戻りはないんだよ』

くるみのテレパシーはそこで途切れた。もう話は終わりということか。

（なんて激しい思い込み。くるみちゃんには何も見えていないし、何も感じていない。なぜそこまで世界を閉ざすの？ なぜそこまで絶望を望むの？）

巨大な黒い影は声ともいえないような叫び声をあげた。絶望と悲しみ、苦痛と悲痛、

ありとあらゆる負の感情を乗せた金切り声のような叫びとともに、全身に黒いモヤを纏った。膨大な穢れに身を包み、史上最強の魔女と言われたワルプルギスの夜を超える魔力が解放される。

「くるみちゃん、あなたの未来は絶望じゃない、悪魔になんてならない」

この世のものとは思えない強大な魔力の塊にマミは立ち向かった。杏子を助け逃げ帰るつもりだったが、くるみの絶望を救いたい。マミはどこまでも優しく、そして強い魔法少女だった。弱く傷つく者を見捨ててはおけない。くるみは想像を絶する魔力の波動を放っているが、心はとても弱い。希望を失い絶望にひた走るその精神状態は、思春期の少女が陥る思い込みによる狭小世界。まるで迷子の子供のようだった。マミの脳裏に、オフィス街で出会ったくるみの幼い笑顔が蘇った。

「悪い夢は終わらせましょう」

螺旋階段の外側に張り巡らせたリボンから、大量のマジカルマスケット銃が立ち上った。マミは両手に1丁ずつマスケット銃を握りしめると、リボンからリボンへ飛び移りながら、打っては持ち替え、打っては持ち替えを繰り返した。マスケット銃は西洋の古銃だが、銃弾の威力はマミの魔法の力に依存する。魔力を帯びた銃弾は、すべてくるみの片腕の付け根に集中して着弾した。

「痛いでしょ。痛いわよね。いめんなさい」

魔法少女は、ソウルジエムで痛覚を遮断させれば痛みを感じなくなる。くるみは痛みなどまったく感じていないのだろうが、マミにはくるみの痛みが我が身のように感じられた。マミの銃弾は、くるみの身体と心を傷付けていた。

マミの銃弾が貫いたくるみの身体からは、黒いモヤがどんどん溢れ出てくる。全身に溜め込まれた穢れのモヤが、真つ黒な煙のように螺旋階段を覆っていった。

しかし、くるみもやられているだけではない。いくらマミの魔弾の威力が高くても、たかが数十発の銃撃で動きを封じられるものではなかった。くるみの黒い手が長く伸び、マミへと迫る。指先は尖り、鋭利な刃物のように鋭い五指でマミに掴みかかった。ほむらの時と同じく、執拗にマミのソウルジエムを狙っている。マミはしなやかに浮き上がると、指と指の間をすり抜けて黒い手を蹴り上げ、宙返りしながら頭上のリボンへと飛び移った。

「強大な力には、それなりに弱点もあるのよ」

そこからさらに上へと飛び上がり、豊かな胸の間から等身大のマスケット銃を持ち上げると、両手で構え轟と撃ち放った。今までのマスケット銃の数倍はありそうな大きな銃弾がくるみの肩に命中する。くるみも腕を伸ばして飛び上がったマミの身体を狙ったが、マミは放った銃撃の反動で後ろに跳ね上がったので、くるみの腕は空を切った。

マミは、自分の力とその使い方をよくわかっている。

「無限に成長する魔力に、扱いが追いついていないのよ」

己の魔法、腕力、素早さなど、持ち合わせた能力は使い方次第で強力な武器にもなり弱点にもなる。ママは戦いの最中、かつて杏子に教えた魔法少女としての戦い方を思い出していた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第2部

23話）

「いい？ 佐倉さん」

数年前、魔法少女として先輩であるマミは、杏子に戦いの基本を教えていた。魔法の使い方、使い魔や魔女との戦い方など、戦いの中でどのように魔力を使っているかをひとつひとつ丁寧に伝授した。杏子は才能ある魔法少女だったが、この頃はまだ魔力の使い方粗が目立った。

「魔法の力は腕力や体力ではないの。魔力のコントロールによって打ち破るべき箇所を突き、身を守り、そして弱き者を救うのが魔法少女なのよ」

マミは狙いすましたマスケット銃の連射で、くるみの黒い身体を撃ち抜いた。マミの射撃は正確かつ的確で、くるみの攻撃の起点となる腕の付け根に寸分の狂いなく命中した。

「そして相手の攻撃は受け止めるのではなく、柔らかく躲し、しなやかに受け流すの」
くるみの腕が伸び大きな黒い掌が振り下ろされると、マミは再びリボンの反動で高く飛び上がる。

『弾き返すんじゃないやダメなのか？』

「私たちは力に依存した戦い方は向いていないの。いくら魔力で身体能力が上がっていても、力技では魔女に敵わないわ」

マミは当時の杏子と会話をしているような錯覚を起こした。あの頃、まだ未熟だった杏子の師として、魔女との戦いの指南をしていた。自ら弟子入りしてきた杏子に魔法の手ほどきをしていた記憶が蘇った。

『そうか、力で押し返すよりも上手く避けて隙を突くってことか』

「その通り。特に私のマスケット銃や佐倉さんの槍のように、間合いの長い武器を使う場合は効果的ね」

空中に浮き上がったマミに向かって、くるみの黒い指が長く伸びてくる。指の一本一本が突き刺すように迫るが、マミは流れるように身体を捻り、回転し、時にはしなやかに受け流し、その攻撃を躲していく。優雅で洗練された動きで空中を舞い、隙を突いてマスケット銃を撃つ。力と手数だけのくるみの攻撃と違い、マミの動作には無駄がなかった。

『もつと派手な攻撃もした方がいいんじゃないか？』

「大きな攻撃はこちらの隙も大きくなるわ。だから使うべきタイミングを計って……」

マミは足場を伝ってくるみの腕の死角に回り込んだ。それを無理に追いかけたくる

みの攻撃が大きく空振りすると、距離をとり、間を開け、タイミングを合わせる。マミは拘束魔法のリボンを繋ぎ、くるみの腕を螺旋階段に巻き付けた。伸縮自在のリボンがぎゅつと締まり、くるみの腕から自由を奪う。

『……か!?』

「ええー！」

マミはマスキット銃の数十倍はある大砲を構え

「ティロ……」

左手を伸ばし、打ち金を発火させるトリガーを引く。

「ファイナーレー！」

凄まじい轟音と共に、巨大な砲身から放たれた特大の一撃がくるみの身体に命中した。爆音と爆発、大気を揺るがすほどの威力を持ったマミ最大の攻撃は、くるみの片腕を見事に粉碎した。

『すげえ！ さすがマミさんだ』

「闇雲に攻撃を繰り返すのは魔力の無駄遣い。魔力をコントロールして、タイミングを合わせる。これが戦いの基本よ」

1対1の戦いにおいて、マミの右に出る者はいないかもしれない。攻撃と防御のバランス、身のこなし、判断力、対応力、そして経験。すべてがトップクラスの魔法少女と

いえる。それほどマミの戦い方は群を抜いていた。

『なあ、マミさん。あたしもマミさんみたいに強い魔法少女になれるかなあ』

「ええ、あなたには才能があるわ。きつと私よりも強い魔法少女になる。どんな相手にも決して負けない魔法少女になる。でも、これだけはちゃんと覚えておいてね。魔法少女は敵に勝つためにあるんじゃないの。弱きを助け、人の幸せを守るためにいるのよ。他人を大切にできる魔法少女になつてね」

ふたりが師弟関係にあったのはずいぶん前。マミはかつて交わした杏子との会話を思い出していた。

くるみは特大の砲撃を受け、片腕が吹き飛んだ。腕がもげた部分から、黒いモヤがどんどん流れ出ている。痛みを感じていないのか叫び声ひとつあげないが、相当なダメージを受けているのは間違いない。

「くるみちゃん」

マミは心を閉ざしたままのくるみに話しかけた。

「あなたはもう元の人間には戻れない。希望を祈らなければ穢れも止まらない。無限のエネルギーで滅びもしない。このままでは、終わらない螺旋階段を上り続けるだけ。これから何人の魔法少女を殺しソウルジェムを喰いつくしても、何も変わらないわ」

くるみの身体から溢れ出るモヤが、部屋中に充満してきた。止めどなくもうもうと出

続ける漆黒の穢れは、悲しみも憎しみも怒りもすべてを受け入れてきたソウルジェムが放つ絶望の澱。

「でも、その穢れの呪縛を解き放つことができれば、あなたは救われる。無限に溢れる穢れの闇を終わらせてあげるから」

『まさか、そいつを殺しちまうのか?』

マミの心の中に、杏子の思念が問いかけてきた。

「いいえ、私じゃくるみちゃんに勝つことはできないわ」

今はまだマミが有利に見えるが、圧倒的な魔力の差は比べものにならない。マミも始めからそれはわかっていた。

「だから私はくるみちゃんを殺すのではなくて、救ってあげるの。私が、彼女を絶望から解放するきっかけになるわ」

『マミ、それはどういう意味だよ』

「円環の理よ」

『え? アイツを円環の理で消滅させようってのか?』

「消滅ではなく、救済。無限の穢れに侵されたくるみちゃんを救う、唯一の手段よ」

穢れの溢れたグリーンフィードを救済する円環の理。くるみの魂を浄化し、永遠の穢れから解き放つにはそれしかない。しかし、くるみのソウルジェムはグリーンフィードには

ならない。だからくるみは、ここまで穢れを溜め続けたにも関わらず円環の理に導かれることなく存在できていた。

『一体どうやって……』

マミが頭の中に描いたのは、暁美ほむらが語った円環の理の真実。

——穢れが溢れてグリーンフィールドへと変わってしまったソウルジェムを、清浄な魂の宝珠へと相転移させる。その作用の一環として、魔法少女とソウルジェムを救済するの
が円環の理

「くるみちゃんのスウルジェムに円環の理は訪れない。だから私が呼んであげるわ。絶望の生ではなく、浄化され悲しみや憎しみのない世界に行きましょう。それが彼女の上
るべき救済の階段よ」

『おいマミ、それってまさか……』

「お喋りはお終い。ちよつと、本気を出しちやっついていいかしら」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト【ア
ニもに！】にて公開中です。

h
t
t
p
s
:
/
/
a
n
i
m
o
n
i
.
マ
ン
ボ
ウ
.
c
o
m
/
/

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

24話）

くるみの無限の魔力は尽きない。吹き飛ばされた肩先は、魔力による肉体修復で異形の変化を遂げた。再生された腕の先には無数の黒いトゲが生え、1本1本がマミの身体と同じくらいありそうな長さの、針のような細長いトゲが構えられた。

くるみは身体の一部を物質へと変化させた。それは魔法少女の能力を超越した、極めて異質な肉体の構造変化。数えきれないほどの黒いトゲが、風切りの音を立ててマミに向かつて放たれた。

マミが魔力のコントロールによって効率よく無駄のない攻防をするのとは対照的に、くるみは限界のない魔力を駆使して広範囲と高威力の手数で攻め立てた。マミは迫るトゲをマスケット銃で撃ち落とすが、数が多すぎる。単発撃ちのマスケット銃ではとても防ぎきれなかった。

「まるで針千本ね」

数時間前の別れ際に交わした約束を、覚えているのだろうか。

「でも、私は来たわよ。くるみちゃん」

「マミの魔力が、強く開放された。マミの立つリボンの足場に魔法陣が敷かれ、淡い光の壁となって周囲を覆う。それは何者にも侵されぬ絶対領域。迫りくる無数のトゲは、光の壁に阻まれ音もなく消えていった。小さな魔法結界のような魔力の壁は、相手の攻撃を弾き返すものではなかった。マミに降り注ぐトゲが、まるで無力化されるように結界の壁の前にかき消された。」

「悲しみも憎しみも絶望も、もつと私にぶつけて来なさい！」

魔法結界に囲まれたマミの身体が、オレンジ色の光を纏った。マミはすべての魔力を開放している。リボンによる拘束魔法や、強力無比な大砲（ティロ・ファイナーレ）とは比べものにならない強い魔力だった。

くるみの放つトゲの数が増す。螺旋階段の部屋を真っ黒に覆いつくすほどのトゲが宙を舞い、渦を巻き、数千本もの黒い嵐がマミを襲った。まるで竜巻が降り注ぐように、くるみの悲しみ・憎しみ・絶望が螺旋に巻かれてマミにぶつけられる。

「どうしたの？ あなたの苦しみはこの程度？ 今まで溜め続けてきた絶望で、無限の魔力で、私を押し潰してみなさい！」

くるみはその巨体をフワッと宙に浮かせ、失った片腕を再生させた。両手を巨大化させ、尖った指先を開き、腕を広げると、マミの左右から両手で挟み潰そうとした。巨大な黒い手が、無限の魔力でマミを挟み込む。

しかし、これもマミの魔法結界を打ち破ることはできなかった。巨大な黒い両手は光の壁に阻まれ、マミの身体に触れることすらできない。結界の表面にバチバチと黒い稲妻を走らせながら力いっぱい押し潰そうとするが、光の壁はビクともしなかった。くるみの黒い稲妻がどんどん勢いを増し、マミの結界に乱反射してそこら中に飛び散った。

すべてはくるみの負の感情。膨大な穢れが魔力に乗せて放たれている。しかし、どんな攻撃もマミの魔法結界の前に無力化された。くるみの悲しみも憎しみも絶望も、マミの光の壁を傷付けることはできなかった。

『おいマミ、魔力を使いすぎだぞ！ ソウルジエムを見てみる、少し抑えないと穢れが……』

杏子の思念がマミの頭で叫んできた。

「大丈夫、まだ平気よ。ちゃんとコントロールできているわ」

『そうじゃなくて！ もうグリーンフィードは無いんだ、穢れを浄化できないんだぞ』

「そうね。くるみちゃんのソウルジエムはグリーンフィードに成らない。彼女はいつまでも……弱い魔法少女だものね」

『何を言ってるんだ!? このままじゃアイツが円環の理で救済される前に、自分が先にくたばっちゃうんだぞ』

マミの髪飾りにあるソウルジエムは、黒く深い濁りをゆらゆらと揺らしていた。ゆら

めく穢れの波紋はまるで生きているようにうねり、混ざり、ソウルジエムを染めていた。しかしマミの表情は優しく柔らかだった。激戦の中で強大な魔力とぶつかり合いながら、くるみの負の感情を受け止めている。すべての魔力を解き放ち、ソウルジエムを穢し、くるみの絶望を救おうとしていた。

「……佐倉さん」

マミは穏やかな顔で杏子の思念に語りかけた。

「いつだったか、私に聞いてきたことがあったわよね」

杏子は未だ目覚めぬままマミのソウルジエムの中に取り込まれているが、ふたりの思念だけが波長を合わせ、魂と魂で会話をしていた。

「どうして他人の為に危険を冒して魔女と戦うのか」

『あ、ああ。昔の話だろ？ こんな時に何だよ』

「私は死の寸前でキュウベえと契約して魔法少女になったわ。あと数分遅ければ息絶えていた時に願いを告げたのよ。……生きたいって」

マミはかつて、交通事故で瀕死の重傷を負い、生きるか死ぬかの瀬戸際に願いを告げ魔法少女になっていた。生きるための選択は魔法少女になるしかなかった。自らの命を繋ぎとめる願いは成就され、命を繋ぐⅡリポンを繋ぐ能力を身に付けた。

「あの時の死の恐怖は忘れられないわ。死ぬっていう感覚は、傷を負ったり血を流した

りする傷みよりも、自分が消えてなくなるっていう恐さに襲われるの。あんな思いは2度としたくないわ」

『そりや誰だつてそうだろ』

「ええ。だから、魔法の呪いによつて死の恐怖に包まれる人を救わなければならない。これがあの恐さを味わつた私にしかできない、私の正義だと思つたの」

マミと杏子の思念が会話を交わす中、くるみの魔力が両腕に集まつた。壮絶な地鳴りを響かせ、身体中から黒い穢れを発し、マミの結界を押し潰そうとする。が、すべての力を無力化する絶対領域はビクともせず、結界の中では静かにふたりの会話が續いてた。

『だからつて、罪のない大勢の魔法少女を殺してきたアイツを救うことはないじゃないか』

「確かにくるみちゃんは殺し過ぎたけど、彼女の生き死にを決めるのは私じゃないわ。私にできることはくるみちゃんの絶望を救うこと。今までも、目の前の傷ついた人を救つてきた。だから、今の私があるの」

『今のマミつて、マミはマミだろ?』

「そう、私は私。魔女と戦い、呪いを退け、絶望に抗い、魔法少女の使命を全うしてきたのが私。あなたと出会い、暁美さんや美樹さんと出会い、ゆう子ちゃんと出会い、大切

な仲間を得られたのが私。今まで私のしてきたことがかけがえのない幸せに繋がったのだから、ここでくるみちゃんを見捨ててしまったら私じゃなくなっちゃうわ」

運命に従い、魔法少女の使命を全うし、孤独と戦い続けたマミが得た最高の幸せは、まさに今だった。マミはニコッと笑った。

「いい？佐倉さん。強さを振りかざすのは弱者のすること。弱き者を救うのが正しい魔法少女なのよ。あの時はケンカ別れであなたとのコンビは解消しちゃったけど、あなたはまだ私の弟子なんだから。そしてこれが、あなたへの最後の教えよ。覚えておいてね」

マミのソウルジェムが黒く揺れる。穢れが限界を超え、魂の宝珠が黒く輝き始めた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第1部）は、オリジナルサイト「アにもに！」にて公開中です。

<https://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第2部

最終話）

マミの右頭部に飾り付けられた花型の髪留め、その中央にあるのはオレンジ色のソウルジェム。魔法少女の魂の宝珠が今、穢れの限界を超えた。黒く美しい揺らめきを溢れさせ、闇の宝珠であるグリーンフィードに姿を変える。

マミは絶対領域を纏ったままりボンの足場を渡り、くるみの元へ歩き出した。

「くるみちゃん、長くつらい日々だったでしょう。でも、絶望の螺旋階段を上るのはこれで終わりよ」

渾身の魔力で押し潰そうとするくるみの両手を受けたまま、マミはゆっくりと歩く。リボンの足場は網目状の道となり、マミとくるみの間を繋いでいた。

『マミ、何をするんだ！ 魔力を止める！ 変身を解いて逃げるんだ！』

杏子の思念が激しい叫びをあげた。

「佐倉さん、ごめんなさいね。約束してたアップルパイ、作ってあげられなくなっちゃったわね」

マミは思い出したかのように、杏子との約束が反故になってしまうことを謝った。数

日前、六千石町に向かう杏子と交わした言葉

——私の作ったアップルパイ、食べてみたいと思わない？

——仕方ないから、アップルパイで手を打つよ

グリーンフィードの件が片付いたら、アップルパイをご馳走する約束をしていた。

『アップルパイなんかいいんだ！ あれは釣られたフリをただけなんだって！』

「ふふ、そういうところはまだまだ子供っぽいよね。意地っ張りです直じやないんだから」

ママはこんな状況でも嬉しそうに笑みを浮かべていた。

『いつだってそうやってお姉さんぶって、ママだって背負い過ぎなんだよ！ 自分の命を捨ててまで他人を救おうなんて、アンタは神サマなんかじゃないだぞ！』

「そうね、私は神様じゃない。でも、もし神様がいるんだとしたら、お礼を言いたいわ。あなたと、みんなに会えてありがとうって」

『ダメだ！ マミ、やめろ！』

ママは光の壁、絶対領域を解いた。くるみの両手を阻んでいた結界がなくなり、黒い巨大な手はそのままママの身体に絡まった。尖った指がママの身体に突き刺さり、背中や足から鮮血がほとぼしる。が、ママは顔色ひとつ変えず、琥珀色の瞳でくるみをしつかりと見た。艶やかな両眼は透き通るほど美しく、まるで自分の子供を見守るような優

しさと穏やかさに溢れていた。

「くるみちゃん、あの時の笑顔には悲しみも絶望も無かったわよね」

マミとくるみが出会ったオフィス街の小さな公園。幼い笑顔を浮かべ、マミの隣に座ったくるみは穢れに満ちた少女の顔ではなかった。もしかしたら心の奥底では、永遠に滅びぬ魔力の終焉を願い、それをマミに託したかったのか。マミの放つ優しい魔力の波動を感じ取り、救いを求める希望の笑顔だったのか。

「もう一度、あの笑顔を見せてみない？ 悲しみも絶望もない、あなたの本当の姿を」

マミのソウルジェムが黒い光を放ち、穢れの解放が始まった。と同時に、螺旋階段の上から眩しい光明が差す。マミのグリーンフシードに反応して今ここに、天照らす円環の理が訪れた。魔法少女の穢れを浄化し、悲しみや憎しみのない世界へ導く、漆黒のドレスを纏いしこの世の理。くるみの放っていた穢れのモヤは、円環の理が照らす後光で光の粒となって消えていく。辺りは優しく暖かな光に包まれ、市松模様の部屋は螺旋階段だけを残し、光の空間となった。

螺旋階段の上に立つ円環の理は、まるで階段の頂上に待つ安息の終着点のようだった。

「これが、私の最後の魔力よ」

と言ってマミは胸元を結ぶ一本のリボンをスルリと解き、くるみに向かって伸ばし

た。リボンの先はくるみの身体と繋がり、柔らかなオレンジ色に発光した。

「私の魔法は命を繋ぐリボン。この最後の一本で、私とあなたの命は繋がったわ」

『マミ、やっぱり……アイツと一緒に死ぬ気だったんだな』

「いいえ、違うの。私もくるみちゃんも死なないわ。円環の理に導かれ、悲しみも絶望の無い世界に上っていくのよ」

穢れの溢れたマミのグリーフシードが、円環の理によって救済される。そしてマミと生命の繋がったくるみもまた、救済の力を全身に受けて膨大な穢れが吸い上げられた。恨み・嫉み・悲しみ・怨嗟・憎悪・呪い、すべての負の感情を乗せた黒い絶望の澱が、円環の理によって浄化されていく。

マミの身体が光の粒に包まれ、ゆっくりと身体が透き通っていった。マミと生命の繋がったくるみの身体も、黒き絶望の衣を脱ぎ去り、無限の因果を断ち切り、元の少女の姿に戻る。あまり長くない髪の毛をふたつに結んだ、マミと出会った頃の幼い顔がそこにあった。

「くるみちゃん、その姿……」

すべての魔力を失い、魔法少女としての能力が消えたはずだが、くるみはあの時と変わらず幼い姿のままだった。あまり長くない黒髪をツインテールに結んだ少女のままだった。

「キュウベえと契約した時から、わたしの時は止まったままなの」

「そうだったのね。でも、これで悲しみや絶望は解き放たれたわ。あなたの時は動き出すわよ」

くるみはニコッと笑った。マミと同じように光の粒に包まれ、身体がゆつくりと透き通っていくくるみの顔には、出会った頃の無邪気な笑顔があった。

階段の頂上から、優しい光がいぎなう。ふたりは手を繋ぎ、螺旋階段に降り立った。いびつなうねりでそびえる市松模様の階段は、円環の理に照らされ純白の輝きを放った。それはまるで光の階段のようだった。マミとくるみは手を繋いだまま、光の階段を上り始めた。

（なんだか、懐かしい人に会える気がする）

階段の頂上には、黒きドレスの円環の理が見下ろしていた。

『行つちまうのか？』

杏子は静かに問いかけた。

「ええ。くるみちゃんの絶望は救われたわ。終わらない始まりは、本当の終わりを迎えたの」

『バカ野郎……弱い者のためだからって、自分まで消えちまってどうするんだよ……』
『ごめんなさいね。でも、これが私。本当の私なの』

『アンタは最後まで、守りたいものを守り通すんだよな。わかってるよ、バママは……そういう魔法少女だもんな』

「佐倉さん、あなたは最高の弟子で大切なお友達よ。ありがとう」

『さよならは言わないからな』

「ええ」

最後の言葉を交わすと、ママとくるみは一瞬の眩い光と共に、螺旋階段の上へと消えていった。ふたりの魔法少女が、円環の理によって救済された。

その姿を、螺旋階段の下から見上げる少女がいたことは誰も知らなかった。

それから間もなく、佐倉杏子は目を覚ました。そこはほむらの家だった。

「きよ、杏子ちゃん！」

ゆう子が驚いたように気づき駆け寄ってきた。ママのソウルジェムに取り込まれていた杏子は、ママの消滅によってほむらの家に空間転移されたのだった。ソウルジェムの中という異空間から抜け出た先がほむらの家だったのは、バママの意思か、あるいは……。

杏子は目を開けるとゆっくりと身体を起こし、しばらく黙ってから

「アイツは、ひとりで رفتちまったんだ。ホント、大バカ野郎だ」

と呟いた。ゆう子が傍で何か言っていたが、杏子の耳には届いていなかった。ほむらはソファに腰掛けたまま、黙って杏子の言葉を聞いていた。

「つたく、どこまでもママはママだったんだ。アイツは、本物の魔法少女だったんだ」顔を伏せ、垂れ下がった前髪で隠れた瞳から、ひと粒の涙が零れ落ちた。杏子の左手には、ソウルジェムの付いていない花型の髪留めが握られていた。

第2部 完

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第1部）は、オリジナルサイト「ア
ニモに！」にて公開中です。

<http://animoni.mambo.com/>

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜（第2部

あとがき）

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の物語〜第2部は以上で完結です。

今編は視点の多くをバママミに移し、「生きることを望む生命はやがて死へと向かう。その理もまた生きるものの運命。人も魔女も、そして魔法少女も」というフレーズをもとにお話を進めてきました。

第1部が起承転結の「起」だとしたら、第2部は「承」と捉えていただけるといいかと思えます。

「承」はつまり、始まりの続きといった意味です。

グリーンフィードの存在が新たな物語を起こした第1部を受け継ぎ、呪われた魔法少女の因果に弄ばれてしまった姉妹の結末。

無限の穢れを有する魔法少女という発想はもちろん創作ですが、円環の理以降の魔法少女末期に訪れる新しい展開となったのではないかと思えます。

そしてバママミの死は、私の思い描く彼女の生き方というか、本当に強い魔法少女の在り方が表現できた気がします。

もちろん杏子やほむらも強い魔法少女ではありませんが、巴マミこそが唯一本物の魔法少女であり、慈愛と友愛に満ちた優しい聖母のようなイメージなんですね。

作中で杏子が語る、「自分の命を捨ててまで他人を救おうなんて、アンタは神サマなんかじゃないだぞ」という言葉に、「そうね、私は神様じゃない」と返しているとおり、実はマミ自身も自分のことを強い魔法少女とは思っていない気がします。

マミはただ、自らに課せられた使命を貫き通すことが強い自分を保つための行動であり、原動力であるのだと思います。

第2部で頻繁に登場する市松模様は、魔法少女まどか☆マギカ本編でも何度か登場するカラーですが、今回のお話に取り入れたのは本編のおとぎ話のようなイメージに加えて新しい意味合いも込めています。

市松模様というのは本来 縁起の良い模様として知られていますが、模様自体に「途切れることなく長く続く」という意味もあります。

途切れることのない悲しみと絶望が生んだモノクロームな世界、そんな螺旋良姉妹の心を現す色として取り入れたのが、今回の市松模様でもあります。

これで第2部は完結し、次はいよいよラストの第3部へと突入、起承転結の「転・結」を描いていくことになります。

まだまだ明かされていない真実が残っていますので、ここからどのように物語が進行

し、どのような結末を迎えるのか。

残された3人の魔法少女たちの運命と、螺良あかねの正体、そして魔法少女まどか☆マギカ本編とは違った新しいエンディングに向けて執筆を続けて参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

マンボウ次郎